まえがき

子供の頃、年の瀬は決まって祖母の家で過ごしていました。

思い出すのは、地下にあった大きな囲炉裏で、串を打った鯛がこんがりと色づいていく様子。祖母や母、叔母たちが大きなテーブルを囲み、黒豆や煮物の仕込みをしている姿。そして、つけっぱなしのテレビからは紅白歌合戦。

祖父の代から営んできた魚屋では、毎年暮れにお正月用の仕出し料理をつくっていました。手が空いているものは、みんな駆り出されます。私の役目は、黒豆を百グラムずつ量って容器に入れ、真ん中にチョロギというシソ科の根を梅酢に漬けたものをちょこんと乗せ、ホチキスでパチンパチンと留める作業。

みんなの笑い声や、囲炉裏の炭がパチパチと弾ける音。にぎやかな音に混じって、テレビから演歌の旋律が流れてくると、私は手を動かしながらじっと耳を澄ませていました。

いつかはあんなふうに綺麗なお着物を着て歌ってみたいなぁ……。

それが、子どもの頃からの夢でした。

一途に夢を追いかけて、念願の紅白に初出場したのは一九九〇年。私はその三年前、二五歳のときに『戻り川』という曲でデビューしていました。

ヒットに恵まれ、数々の賞もいただきました。まわりから見れば、順風満帆な道を歩んでいるように見えたかもしれません。でも、当時の私は悩んでいました。

どんなに曲が売れても、いくら賞をとっても、私はずっと不安でした。

実はそのとき、私は本当の意味で新人ではありませんでした。

伍代夏子としてデビューするよりずっと前、二〇歳そこそこから人前で歌ってきました。キャンペーンのため、小さなレコード店の店頭から場末のスナックまで、呼ばれれば全国どこへでも行き、一枚一枚レコードを手で売って歩きました。それでもなかなか芽が出ず、名前を変え、レコード会社を変え、ようやくつかんだ成功でした。売れない時代が長かった分、いま手にしているものが一瞬でなくなってしまうのではないかと不安だったのです。

この舞台に立っていていいのだと思えるようになったのは、デビューしてから一〇年は経っていたでしょうか。紅白に七回連続出場して、周りから「常連ね」とようやく言われるようになった頃のことです。

それまでは馬車馬のように働きました。

結果を残して、なんとか自分を納得させたい。そのためには一カ所でも多くキャンペーンに出向き、一人でも多くの人に歌を届けようと走り回っていました。そうして無我夢中の一〇年があっという間に過ぎ去っていきました。

その後も、いろいろなことがありました。

生涯の伴侶に出会って結婚し、一度は引退を覚悟しました。

様々な喜びや苦労を味わいながら歌い続け、私は今年でデビュー三〇周年を迎えます。

その間、一緒に頑張っていた仲間が何人も挫折してこの世界を去っていきました。

結婚して、いまでは子供や孫に囲まれている人もいます。地元に帰って店を開いて頑張っている人もいます。みんな、それぞれの人生を生きています。

けれど、こうして歌い続けている私の人生が、彼女たちの人生より幸せかどうか、くらべることはできません。

私は結婚していますが、子供は産んでいません。だから、老後は淋しい独り暮らしかもしれません。逆に彼女たちの中には子どもや孫に囲まれて賑やかな老後を送る人もいるで

しょう。

何が幸せかは、結局人生の最期の瞬間まで誰にもわからないのです。

過ぎたことをぐずぐず言うのは好きではありません。後悔することは数限りなくあるかも知れないけれど、それは自分が選んだ行いの結果です。だから、思っても決して口にしないのが、女の意地。

つべこべ言わずに信じた道を外れずにやっていれば、きっとよいことがある。

そう信じてやってきて、私のこれまでの人生は上出来だったと思っています。

紅白を夢見た幼いころから五〇代半ばに差しかかろうといういまに至るまで、この半世紀、私がいかに自分の人生と格闘してきたかを一冊に詰め込みました。

歌の世界とどう向き合い、チャンスをどうつかんできたか。日々の暮らしの中でパートナーをはじめとしたまわりの人々といかに付き合い支えられてきたか。そして、これまであまり語ってこなかった人生の後半戦への意気込み（？）なども語っています。

表に出る人間ならば、少しは格好をつけるものかもしれないと思いつつ……、ダメなところも余すところなく、等身大の伍代夏子をお見せしようと思います。

なぜなら、人はありのままが一番だから。

そんな姿が、ちょっとでもみなさんの人生を明るくするヒントになれば、うれしく思います。

伍代夏子

目次

プロローグ 14
私にとっての演歌とは

第一章 いまがいちばん幸せ

歳を重ねるのも悪くない！ 22
結婚適齢期は人それぞれ 27
一〇〇％の自信がなければ決断しない 31
結婚は異文化コミュニケーション 34
嬉しい誤算 36
譲れないポイントを相手に伝える 41
結婚が変えたファンとの素敵な関係 44
仕事以外の自分をつくる 48

第二章 歌うことが何より好きだった
——「歌手・伍代夏子」が生まれるまで

「きっといつか歌手になれる」と信じて 54
歌本片手に押入れで歌うのが最大の楽しみ 57
チャンスは直感でつかむ 61
憧れの八代亜紀さんのもとへ 66
どん底からのスタート 70

三度目の正直で見えた光　74
ニックネームは「手売りの女王」　77
どこにいてもホームをつくり出す　82
涙が止まらなかった紅白初出場の記者会見　87

第三章　演歌に込められた思い

運を引き上げるのは自分　94
私にとって一番大切なこと　97
想像力が説得力を生む　100
ヒットは寝て待つ　107
ぶつかってこそ、のレコーディング　112
準備せずして舞台には立たず　117
きっかけは一枚の写真　121

第四章　「いつも元気」の方法

働き盛りを襲ったC型肝炎　126
苦しい治療と仕事の狭間で　129
病と向き合うにはまず「知る」こと　131
更年期障害は人生の終盤戦の予行練習　133
ストレスの原因は思い込み？　136

運動嫌いの私がたどり着いた健康法 138
私の心安らぐひととき 140
収穫期のよろこび 143
一年のしめくくり 146

第五章　誰かのためにできること

遠くの誰かのために行動すること 150
一人ではできないことも、集まればできる 155
おばあちゃんたちの笑顔が教えてくれたもの 159
父から学んだ「責任を持つ」ということ 162
立つ鳥、悔いを残さず 166
短気な父と呑気な母 169
下積み時代の大きな支え 173
「演歌三人娘」の絆 176
頼もしい「夏子組」に感謝 179

第六章　悔いも未練もなし

次世代の歌い手を探して 184
歌い手を支える人材を 186
私のひそかな夢 189

演歌の未来　191
私の引き際　194
老後は楽しくすっぴんで　195
悔いも未練もなし　198

編集協力／澁川祐子
資料提供／ソニー・ミュージック・ダイレクト
写真提供／居坂和典
松本修二
伍代夏子

プロローグ

私にとっての演歌とは

あるときは、わがままな男に尽くし、ひたすら待つ女。
またあるときは、愛した男を忘れられずに孤独に耐える女。
歌の中で、私はあらゆる女性を演じてきました。

裏切りや後悔の念、切なさや悲しみ、そして抑えられない激情……。演歌はそうした暗い感情もすべてひっくるめて、人間の姿をありのままにさらけ出します。数分の歌に、人生の喜怒哀楽が詰まっているのです。だから歌う者は、その歌の主人公になりきり、その感情をあますところなく伝えなくてはならない。

演歌とは――。

私にとっては「演じる歌」。

一人の女性の生きざまを、ほんのわずかな声の震えや息遣いでもって演じる。それが、演歌歌手として三〇年歌ってきた私の実感です。

もともと演歌という言葉は、明治時代の「演説歌」に由来すると言われています。自由民権運動の嵐が吹き荒れるなか、言論への取り締まりが日に日に厳しくなり、演説の代わりに政治を風刺する歌が歌われるようになったのがその興りだとか。

演説の歌から出発して、その後どのようにして現在の演歌になっていったのか。いわれには諸説ありますが、いまのように演歌が歌謡曲の一ジャンルとして確立されたのは、戦後の高度成長期のこと。以来、演歌は人生の機微を表現する歌として人々の心に訴えてきました。

新しい歌をいただくと、真っ先にすることがあります。それは歌に出てくる女性をイメージすること（私の場合、その女性は頭の中に勝手に現れるのですが）。

例外もありますが、曲をつくるときはたいていメロディよりも先に歌詞をつくります。

その詞をいただいた段階で、私の頭の中には一人の女性のイメージが浮かびあがってきます。

この女性はちょっと固くて退屈そうな感じかな。

髪はぜったいショートヘアで、割烹着じゃなくてエプロン。

台所から見えるベランダには、ひらひら舞う洗濯物と、いくつかの植木鉢。

団地、つっかけサンダル、それから物干しの洗濯バサミ……。

こんなふうに、詞には書かれていないディテールを、頭に一つひとつ思い浮かべていくのです。

歌詞にメロディがつくと、イメージはさらにふくらみます。曲によって、思い描いていた女性像がより鮮明になることもあれば、「想像していたのと、ちょっと違うな」と印象が変わることもありますが、それはそれでよし。

そして、歌を入れる頃には、私はもうその女性そのものになりきっています。

若々しい女性であれば、少し高くてハリのある声。成熟した女性であれば、低くて落ち着いた声。同じ音程でも微妙に声を使い分けます。さらに歌の中の女性が笑っているとし

たら、それが泣き笑いなのか、満面の笑みなのかというのがわかるぐらいまで声色に気を遣います。

お茶の間で聴いている方にとって、それはほんの些細な違いでしかないかもしれません。歌い手が歌の世界をリアルに想像して表現していようがいまいが、表面上はほとんどわからないことなのかもしれません。

でも、そのリアリティがなければ、歌に魂を吹き込むことはできない。私はそう思うのです。

成熟は一つの武器になる

歌は生き物。

最近、しみじみそう思います。

同じ歌を歌い続けていても、そのとき、そのときの自分の置かれている状況や気の持ちようによって、歌はさまざまな表情を見せます。

二〇代ならではの解釈があり、そしてまた五〇代になったいまだからこそ表現できることがあります。

デビュー曲の『戻り川』は、男の気まぐれをひたすら許して待つ女性が主人公。男を困らせないように、涙も見せなければ、「行かないで」とも言わない。眠ったふりをして、男が去っていくのをただじっと耐え忍ぶ。そんな女性の切ない心情を歌っているのですが、歌詞の中に「いいの　いいのよ」というフレーズがあります。

この歌詞をもらったとき、私は二七歳。その言葉通りに意味を受け取っていました。

この女性は、旦那様の影は絶対に踏まないという控えめな人。

きっと男性の三歩後ろからついていくようなタイプだろうな。

そんなふうに想像して、「私のことは気にしなくていいのよ」という気持ちを込めて、物わかりのいい女性を演じて歌っていました。

それから一〇年程過ぎ、三〇代後半にさしかかった頃、いつものようにステージで『戻り川』を歌っていたときです。「いいの　いいのよ」のところで、突然「イヤ」という思いが込みあげてきたのです。

（この人、本当は耐えて待っているのはイヤなのよね。でも、思いの丈をぶつけたら、彼が離れて行ってしまうような気がして言えなかったのよね……）

そんな裏腹な女心に気づいたのです。歌は、その歌い手の解釈や表現の仕方でずいぶん違った顔を見せるものだということを、そのときにつくづく実感しました。

人は生きていると知らず知らずのうちに、いろいろなことから影響を受けているもの。経験から学んだこと、読んだもの、見聞きしたもの、ありとあらゆることが自分の中に貯えられて人は成熟していくのだと思います。

そのうち、歌に対する解釈も少しずつ変わってきます。生身の人間が歌う限り、歌もまた移ろい変化していくのが自然なことです。もちろん、最初からずっと変わらないこともあります。初めの歌い方でいいと思ってそれを守り続けるのもよし、違うと思って変わっていくのもまたよしではないかと思います。

以前、ある先輩がとても印象的なお話をしてくださいました。それは、若い頃のような声は出なくなったけれど、その代わり歌に説得力が出てきた、というお話。

声を出すのには、ノドの筋肉を使いますから、当然加齢とともに声だって衰えていきます。体力がある若いうちは、解釈が違おうが、微妙なニュアンスが表現できなかろうが、若いなりに勢いよく歌って、そのフレッシュさが評価されるときなのかもしれません。

では、年齢を重ねたらどうでしょう。パワーを失ったノドはお払い箱なのでしょうか。

いいえ、それは違います。

人生は、よくできたもので、筋力が衰えて高い声が出にくくなったり、息が続かなくなったりしたときに、今度は長年積み重ねてきた経験や技術力が生きてくるのです。

演歌は、人生そのものを表現する歌。

酸いも甘いも噛み分けた人生経験が説得力となって、歌に深みを与えてくれます。だから、演歌にとって成熟は一つの武器になるのです。また、それだけにその人が何を感じ、どう生きてきたかが問われるのも事実です。

この先、自分が六〇代になったときに、どんなふうに歌っているのか。

想像すると楽しみでもあり、ちょっと怖くもあります。そんな演歌への尽きせぬ興味が、私をまた新たなステージへと向かわせるのです。

第一章

いまが いちばん幸せ

歳を重ねるのも悪くない！

私はいま、人生で一番の幸せを感じています。

売れない下積み時代の二〇代、馬車馬のように歌一筋で働いた三〇代。降って湧いたような病気の告知と苦しい治療。そして三七歳で結婚をして、結婚生活と仕事を両立させようと奮闘した四〇代。

いつの年代も一生懸命に生き、苦労はありましたがそれなりに楽しいこともあり充実していました。けれど五〇代になったいま、毎日が楽しくてしかたないのです。

よく「若い頃はよかった」「二〇代の頃が一番楽しかった」と過去を懐かしむ人がいますが、私は少し違います。

たしかに若い頃はいまよりずっと体力もあったし、自由になる時間もたくさんありました。

バイトやレッスンに行く合間に、友人と着飾って街に繰り出したり、そこで男の子に声をかけられてちょっと心が躍ったり。深夜営業の喫茶店では、ココア一杯で朝まで仲間とおしゃべりして粘るなんてこともよくありました。とにかく目一杯遊び倒した青春時代。

でも、振り返ってみると、意味もなく過ぎていく楽しさしか思い出すことができません。

いつも楽しくなきゃいけない、いまこの瞬間を楽しまないともったいない――。

そんな若さゆえの焦燥感もあったのかもしれません。

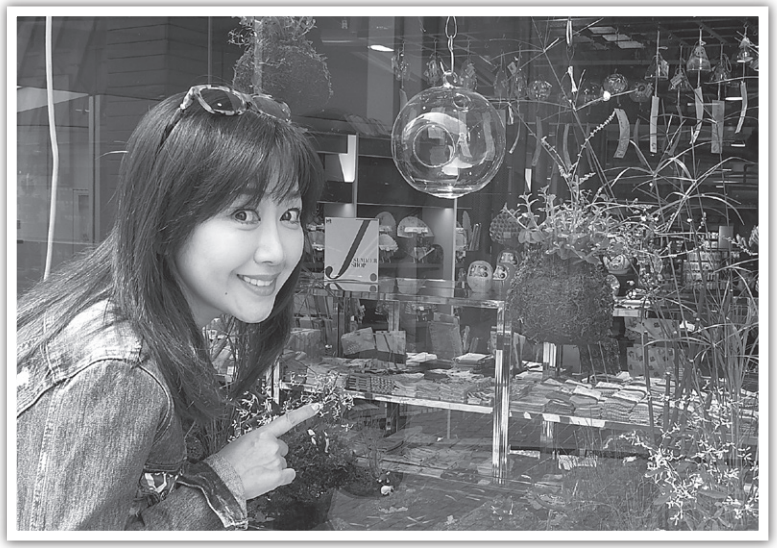
その頃に比べると、いまの方が好奇心や冒険心も旺盛で、何をしてもとても楽しく充実しています。

私は自他ともに認めるせっかちな江戸っ子。ハッキリとものを言うタイプです。けれど、しっとりとした演歌を歌っているせいか、控えめな古きよき女性のように思われることが少なくありません。

とくに新人の頃は、歌番組でもほとんどおしゃべりする機会がないため、私は歌のイメージそのままのおとなしい女性だと思われていたようです。そんなみなさんの抱くイメージを壊すわけにもいかず、思ったことがハッキリと言えない、という場面も数知れずあり

50歳をすぎて、いまが一番充実している私

明洞にて



渋谷ロフトにて

ました。

たとえば、インタビューなどで当時、必ずと言っていいほど聞かれた「結婚は？」という質問。

もともと結婚願望というものは、私にはそれほどありませんでした。なぜかはわかりませんが、子供の頃から「自分は長男なのだから家を継がなくては！」と思っていた私。実際は次女ですが、そういう役割の星の元に生まれたと思っていたのでしょう。お婿さんならともかく、苗字が変わる結婚など論外でした。

ましてや仕事は忙しく、旅から旅へと全国を飛び回る毎日。面倒な結婚生活より、一人がいいに決まっています。けれど、色恋を歌っている人間がそんな風にそっけなく答えられるはずもなく、「いい人がいたら、したいですね。募集中です」などと模範的に答えてきたのです。

でもいまは、イメージを越えて、言いたいことはハッキリと言い、すっきりとストレスを溜めない生活を送らせていただいています。だから毎日が楽しくて仕方ないのです。

この心境の変化が、俗に言う「おばちゃん化」というものなのでしょうか。

だとしたら、「おばちゃん化」大賛成。おばちゃん化ほど楽しいものはありません。

若い頃は、誰もが人の視線に敏感なもの。けれど歳を重ねるにつれ、どうせ一度きりの人生なのだから飾らずに自分に正直に生きたいと思うようになり、どんどん自分の心に素直になっていくのでしょう。

最近では、テレビのトーク番組などに出演しても肩に力を入れずに現場を楽しむことができるようになりました。

たとえば、仲のいい歌手仲間と旅番組のロケに行ったとき。お酒が入ればふつうに酔っぱらってしまいます。一〇年前の私はテレビ映りを気にしたり、化粧落ちを気にしてあまり食べないようにしたりしていました。話す内容や言葉も選びに選んで、とても慎重だったと思います。でもいまは、カメラが回っていることも忘れてしまうぐらい、のびのびと番組を楽しませていただいています。

歳を重ねて、やっとそんなふうに等身大の自分でいられるようになったのです。

人の目を必要以上に気にせず、自分の気持ちを大切に生きる。

これが五〇代になって辿り着いた、私の人生を謳歌する秘訣です。

結婚適齢期は人それぞれ

人の目を気にせず、ありのまま生きる。

その境地に至った背景には、経験を重ねるうちに少しずつ自信がつき、余裕が出てきた、ということもあります。けれど、それ以上に大きな影響を及ぼしたのが「結婚」でした。

ご存知の方も多いと思いますが、私の夫は俳優で歌手の杉良太郎です。

先ほども言いましたが、私は主人と出会うまで結婚する気などさらさらありませんでした。相手が誰であれ、「結婚」ということに興味がなかったのです。

子供の頃から、家を継ぐのは自分だという妙な思い込みがあった私は、誰かのお嫁さんになりたいと夢見た記憶がありません。人に養ってもらう自分が想像できなかったのです。将来は手に職をつけて、必ず両親に家をプレゼントするのだと固く心に決めていました。

私は何をするのにも、思い立ったときに、すぐに始めたくなります。

仕事なら仕事、料理なら料理。なにかやりたいことがあるときは、そのことだけに集中したいのです。

そんな自分の性格をよくよくわかっていたので、誰かと一緒に暮らすなんて到底無理だと思っていました。もちろん、お付き合いしている人がいたときもあります。もしかしたらこの人が運命の人かも、と思ったこともありました。でも残念ながら、私の結婚願望が目覚めることはなかったのです。

デートで食事に行くとなったとき「どんな店に行きたい?」と聞いてくる人を、世の女性たちは、優しい人だと思うのでしょうか。

お店でメニューを選ぶとき、自分の食べたい物を決められずに「君の好きな物でいいよ」と言う人を、思いやりがあると思うのでしょうか。

私は少し物足りなさを感じてしまいます。

「もっと私をグイグイ引っぱっていってくれる男らしい人はいないかしら……」

そう思いながら、別れも何度か経験し、そのうちに無理して結婚相手を探すより、ひとりのほうがいいと思うようになったのです。以来、恋愛から遠ざかり、がむしゃらに仕事

2000年4月2日明治神宮にて

に打ち込みました。

人間関係も仕事がらみがほとんどでした。そして、生活のすべてが仕事を中心に回っていきました。

しかし、そんな仕事人間の私が結婚によって一変しました。人生において、仕事以外のプライベートな自分が大きな割合を占めるようになったのです。

それは、自分でもびっくりするぐらい思いがけない気持ちの変化を生みました。

他愛のないおしゃべり。主人がいてくれるだけでこんなにも安らぐ心。

その日一日の出来事を語り合いながら二人で食べるご飯のおいしさは格別です。

「いつも一線で活躍していなければ」「レコードの売り上げを維持しなくては」と、常にプレッシャーと隣り合わせだった私でしたが、そこに仕事以外の「別の自分」ができたことで、気持ちに大きな余裕が生まれたのです。

もうちょっと早くに出会っていれば、もっとラクに生きてこられたのかなと思うこともあります。でも、一人で懸命に踏んばってきたからこそ、いまこうして二人でいる時間の大切さを噛みしめることができるのかもしれないと思うのです。

結婚するのにふさわしいタイミングは人それぞれ違っていて当然。いまだと思うときこそが、その人の「結婚適齢期」なのではないでしょうか。

一〇〇%の自信がなければ決断しない

主人と出会ったのは、私の振り付けを手がけてくださっていた日本舞踊のお師匠さんに、

「杉さんの舞台は素晴らしいから、ぜひ観に行きなさい」

と言われたのがきっかけでした。

この人はすごい。本物だ——。

舞台を観て、圧倒されました。もちろん、同じ業界の大先輩ですから、それまでに何回かお会いしたことはありました。子供の頃から時代劇は大好きだったので、テレビの画面を通じて杉さんのお芝居も観たことはありました。

でも、生で観るその迫力たるや、言葉では言い表せないほどの凄まじさを感じたのです。恐る恐る楽屋へご挨拶に伺うと、杉さんは満面の笑みで歓待してくれました。周囲からは「すごく厳しい人だ」と聞かされていたので、「なんだ、とても優しい人じゃない」と拍子抜けしたのを覚えています。

杉さんは、とても真面目で純粋な人です。

何事にも真剣で、困った人がいたら助けずにはいられない。

一度、口にしたことは必ずやり抜く。

まっすぐで、とても不器用です。だから、本当は優しくていい人なのに、誤解されやすいところもあるのでは、と思いました。

そんな杉さんの本質にふれるにつれ、いつしか私の杉さんへの思いは、ただの尊敬から大切な人生のパートナーとして「守ってあげたい」という思いと「ずっとそばにいて欲しい」という深い情愛に変わっていったのです。

大きな決断をするとき、私はいつも誰にも相談しません。人に責任を押しつけたくないからです。

自分の人生は自分で背負うしかありません。

だから私は、自分が「一〇〇%、この決断でいい」と自信が持てるまで決断を下しません。その代わり、一度決めたことは絶対に覆したくない。何があってもその決断を全うしようと必死に努力します。

結婚のときもそうでした。

当時、杉さんは五四歳、私は三七歳。一七歳差の電撃結婚です。

まわりは「すぐに離婚するだろう」と思っていたかもしれません。

でも、私の胸には一〇〇%以上の確信がありました。

杉さんは、出逢うべくして出逢った私の生涯のパートナー。

これから先、どんなことが起ころうとも二人でなら乗り越えていけると。

結婚は異文化コミュニケーション

結婚は、違う家庭で育ってきた人間同士が一緒になって、新しい家庭をつくっていくこと。いくら付き合いが長かったとしても、いざ結婚して生活してみると「えっ、そんなところが気になるの？」とか「こんな一面もあったんだ」と気づくこともたくさんあるでしょう。

私達の場合は、お互いのことをほとんど知らない電撃結婚だったので、毎日が驚きの連続でした。たとえるなら、異文化がいきなり押し寄せてきたような感じです。

生活が始まって一番驚いたのは、好む部屋の温度の違いです。杉さんのプロ意識はとても高く、風邪などをひかないように年間を通して部屋の温度や湿度を一定に保ち、徹底した体調管理をします。とくに湿度を高く保つことは声を生業とする私たちにとっては、とても大事なことです。

ところが私ときたら、いままでそういったことにはとんと無頓着。

どちらかと言えば暑がりで、少々すきま風が吹くぐらいがちょうどいい。

だから、主人の好む設定温度は、初めは私にとって、まるで熱帯雨林のようでした。

暑くて湿気が多いとむくむし、気分もどんよりしてくるのですが、人間って慣れるものです。おかげさまで、いまではすっかり熱帯雨林の住民と化し、風邪もひきにくくなりました。

お雑煮文化の違いもちょっとしたカルチャーショックでした。

私は東京生まれの関東人なので、我が家のお雑煮は醤油仕立てのすまし汁。四角いお餅を焼いて入れます。

ところが、主人は神戸生まれの関西人。関西のお雑煮は白みそ仕立てで、丸いお餅は焼かないで煮るのだと言います。

お正月は慣れ親しんだ味で迎えさせてあげたいもの。レシピと首っぴきで関西風お雑煮を初めてつくった私は、「芽が出るように」と入れる縁起物のくわいの芽を、知らずにきれいに切り取ってしまいました。

好みも習慣も何ひとつお互いのことを知らずに始めた結婚生活は、小さな失敗もありましたがそれ以上に楽しい発見がたくさんありました。

私達はいつも何かあるたびに話し合って、歩み寄ってルールを決め、ふたりだけの暮らしのスタイルを築いてきたのです。

お互いを尊重する気持ちがあれば、文化の違いもまた楽しいものです。

嬉しい誤算

結婚したら、仕事を続けることはできないだろうと思っていました。

ひとたび結婚すると決めたらその選択を全うしたい。完璧主義の私のこと、一から十までしっかりと相手の面倒をみたいと思っていたからです。

部屋はいつもきちんと整理整頓して、ホコリ一つ落ちていないように。

シャツにはピシッとアイロンをかけて、靴もピカピカに。

結婚するまでは時々パーティー料理をつくったりするぐらいでしたが、お料理も勉強して、おいしい家庭料理を食べさせてあげたいと思っていました。

おまけに、相手は「杉良太郎」です。

とても片手間でお世話できるものではないだろうと覚悟していました。梨園の妻ではないですが、自分は表舞台から退いてサポート役に徹してもよいと思ったのです。

ところが蓋を開けてみたら、主人は本当に手のかからない人でした。

「おーい、お茶」とも言わないし、お料理も上手です。アイロンがけもクリーニング屋さんがしてくれます。

料理はともかく、私がやらなければならないことはそれほど多くはなかったのです。

もともと主人は、仕事を「辞めろ」とも「続けろ」とも言いませんでした。どうするかは、私に委ねられていました。

「辞められるわけがない」と思っていたかもしれないし、「辞めさせるわけにはいかない」と思ったかもしれません。ただ、これは私の憶測ですが、できれば続けてほしいと思っていたのではないかと思っています。

そのことを感じるのが、私がテレビ番組に出たときの主人の反応です。

主人は私が出ている番組を見るたびに、いつもいろいろとアドバイスをしてくれます。「この顔の角度いいね」と褒めてくれたり、時には「衣裳の色とマニキュアの色が合ってないよ」というものまで。

芸に対しては本当に真摯な人なのです。

でも、こんなふうに私の仕事に対しても真剣に考えてくれている姿を見ると、やっぱり辞めなくてよかったなと思います。

仕事を続けてみてわかったこともあります。

それは、私がまだ余力を残していた、ということ。

結婚するまでは、時間の使い方はすべて自分の自由。仕事が第一で、時間の大半を仕事に費やしてきました。

ですが結婚したとなると当然、仕事一色というわけにはいきません。仕事に割ける時間も必然的に限られてきます。

結婚前は歌詞を覚えたり次のステージのためのイメージトレーニングに費やしていた就

寝前のひとときは、食材の下ごしらえや時短レシピの研究時間に変わり、じっくり台本を覚えたりする余裕はありません。そこでちょっとした移動時間も利用するようにしてみました。

それまでもセリフを覚えたりするのは早いほうで、暗記力にはけっこう自信がありました。でも、いまから思えば、あの頃の自分はまだ甘かったと思います。時間に限りがあるとわかると、人の集中力というものはさらにアップすることができるのです。

私も実際に結婚してからのほうが、セリフ覚えが早くなりました。まだ三日あるから……と思っているとなかなか覚えられないものも、「いま覚えなければ間に合わない」と思うと不思議なくらい早く覚えられるのです。

人間の脳は切羽詰まったときに目覚める場所もあるようです。

以前は一〇の時間を費やしていたことが、半分ぐらいの時間に短縮してできるようになると自信にもつながります。時間の制約ができたことで、かえって仕事の刺激になったというようなうれしい誤算はいくつもありました。

また、仕事で不在のときもあるだけに、二人でいられるときは思いきりその時間を大切に過ごします。仕事と家庭、そのどちらにも誠心誠意取り組むことで、両方にいい影響を

及ぼすことができたようです。

昨今は経済的にも精神的にも自立した女性が増え、晩婚化が進んでいると言われています。私もまさにその一人でした。

かつての私がそうだったように、独身でいる多くの女性は「仕事が忙しくて恋愛している暇がない」とか、仮に結婚を考えている人の中には、「自分の時間が奪われてしまうのではないか」と躊躇している人もいるでしょう。私自身、結婚するまではそう思っていました。

でも、何とかなるものです。

たしかに結婚して自由に使える時間は少なくなりました。ふらっと思い立って、遠くへ旅行に行くこともなくなりました。でもその一方で、逆に自分の可能性が広がったと感じています。大切な人と過ごす心安らぐ時間は、何にも代えがたいものなのです。

時間の制約をマイナスととらえるのか、プラスに転換するかは自分次第。

家庭と仕事を天秤にかけることなく、両方を大切にする術は、知恵を絞れば必ず見つかるはずです。

譲れないポイントを相手に伝える

いつもは、一分でも早い電車に飛び乗って温かい夕飯を準備しようとしている私ですが、唯一例外の日があります。

それはレコーディングの日。

歌手にとって、レコーディングは命とも言うべき大事な大仕事。そして、私の一番好きな時間です。

レコーディングだけは絶対におろそかにしたくありませんし、仕上がりに納得するまでは、スタジオを出る気持ちにもなれません。

だから、レコーディングの日だけは、

「夜遅くなるかもしれないけれど、ごめんね」と言って出かけます。

そして、そういうとき主人はいつも、「気の済むまで歌っておいで」と快く送り出してくれます。

結婚しても女性が仕事を続けていくためには、パートナーの理解や協力が欠かせません。家事に協力的な男性が増えたとは言いますが、とはいえ、まだまだ女性のほうが負担は大きいでしょう。

私たち夫婦は、芸に対して真摯に向き合い、常に完璧さを追求しようとするところがとてもよく似ています。だから、ことさら言葉にしなくてもお互いに理解し合える部分が多く、それが大きな支えになっています。

主人はプライベートな話をするのをあまり好みませんが、我が家のキッチンでは食器洗いと揚げもの調理は主人の担当です。私が食器を洗おうとすると「いいから　いいから」とスポンジを取り上げ、絶対に洗わせてくれません。

「私の手が荒れるといけないから」というのがその理由。揚げものも油ハネで手にシミができたらいけないとの優しい配慮です。

「歌手なのだから、マイクを持つ手はいつもきれいにしていないとね」

そう言いながら揚げてくれる天ぷらは、冷めてもカリッとしていて、とても美味しいのです。

ただいま、新メニューの試作中！

ちょっと話がそれましたが、仕事を続けていくために大切なのは「自分にとって何が大事か」ということを相手にきちんと理解してもらうことだと思います。

そして、理解してもらったことに対して、きちんと感謝すること。

譲れない大事なものをお互いに理解して敬意を払う。そんなふうにお互いを思い合える関係をこれからも大切にしたいと思っています。

結婚が変えたファンとの素敵な関係

結婚したことで大きく変わったこと。

その一つに、ファンとの関係が変化したということがあります。

それまでは、「亡くなった妻に似ているから結婚してください」と履歴書を送ってくる年配の方や、ステージに花束を持ってきて「結婚してください」と囁く同世代の方まで、

ファンクラブ「夏子組」運動会。いまや「みな親戚」状態！

本当にいろいろな方がいました。
熱烈なファンの支えはありがたいと思いつつも、正直に言わせていただくと、単に女性として見ていただくより歌や芸風や人柄を気に入って応援してほしいという思いがずっとありました。
「私が歌う歌の世界が好き」だったり、「歌へのこだわり方が好き」だったり、人によってそれぞれ理由は違っていていいのですが、とにかく私の本質を見て応援してほしいと思っていたのです。
駆け出しの頃の私のコンサート会場は、私を歌のイメージそのままの理想の女性だと思い込んだ男性ファンでいっぱいでした。
けれどそういう人達は、だいたい次のコンサートには来てくれません。もともと私の歌や芸風が好きだったわけではないので、コンサートで私のチャキチャキの江戸っ子気質にふれ、その理想像が崩れてしまうのでしょう。
女性扱いされるより、仕事できちんと評価されたい。
一生懸命に働いている女性ならば、一度や二度は思ったことがあると思います。男性に囲まれて仕事していると、ときに自分が女性であることが邪魔に思える瞬間があります。

私は、まさにそんな心境でした。
結婚を決意したとき、スタッフのなかには、「結婚のことはなるべく言わないように」とアドバイスをくれる人もいました。
結婚によってファンが離れていってしまうこともあれば、逆に新たなファンを獲得することもあります。だから情報をどの程度、オープンにするかはとても神経を遣う問題なのです。
しかし、こんなときこそ本物のファンは残ってくれると信じていた私には、そんなことはまったく問題になりません。
ファンクラブの会報には、しっかりと結婚式の写真を載せ、「杉さんはこんな人ですよ」と私の選んだ人を紹介したり、「夫婦でこんなボランティアをやっていますよ」と報告したり。私の歌も人柄もパートナーも、「すべてひっくるめて、応援してくださいね！」という姿勢を貫いてきたのです。
おかげさまで私のファンクラブは、いまや「みな親戚」状態。
まるで家族のような濃いお付き合いができるようになりました。「今度はイモ掘りに行

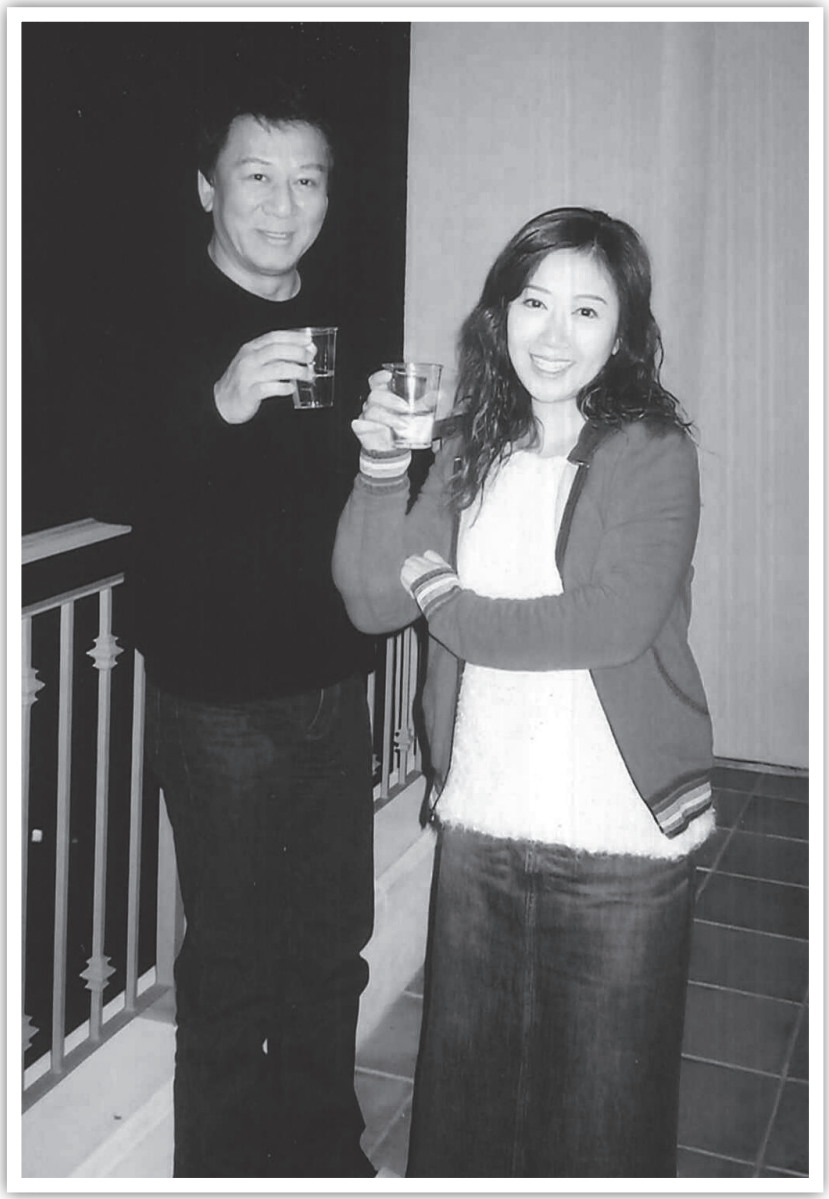
こうか」とか「クルーズもいいね」とか、いろいろなイベントを考えて、みんなでワイワイ出かけることがとても楽しいのです。

こうして結婚を機に、私が長年思い描いていたようなファンのみなさんとの理想的な関係が築けるようになりました。そして、それがさらに仕事を続けていくうえで大きな励みになったことは言うまでもありません。

仕事以外の自分をつくる

二〇〇二年の大みそか。私は紅白に落選しました。

その年のリリースは『都忘れ』。初の歌謡曲路線で、とてもおしゃれな作品です。曲に合わせてドレスを着て歌うことにしたのですが、セールスは思うほど伸びず、結果は残念ながら落選。一九九〇年に『忍ぶ雨』で初出場して以来、ずっと更新してきた連続



紅白落選で落ち込む私を励ましてくれた主人に感謝

出場の記録も一二回でストップしてしまいました。落ち込んだのは言うまでもありません。

その年、私は初めて海外で年を越しました。場所は、ロサンゼルス近郊のニューポートビーチ。

そこは以前、杉さんが仕事に疲れて「一人になりたい」と思ったときにはいつも訪れたというコンドミニアムでした。

ひとりボンヤリとただ船を眺めていたという、運河沿いのバルボア・ベイ・リゾート。杉さんにしてみれば、「自分もつらかったとき、ここで過ごしたよ」ということだったのでしょう。

わざわざ言葉には出しませんでしたが、落ち込んでいる私をせいいっぱい慰めてくれているようでした。

クリスマスからお正月にかけてそこに滞在し、大晦日はロサンゼルスの後援会の方々と、みんなで年越しそばならぬ、年越しちゃんこ鍋パーティー。

テラスから見下ろすハーバーでは、停泊しているクルーザーでカウントダウンをしようと集まった人々が、シャンパングラスを掲げてそのときを待っています。

そして

「3、2、1、HAPPY NEW YEAR!」

私たちも思わず、グラスを掲げていました。

「こういうお正月の過ごし方もいいものだ……」

仕事をしていない年末なんて思い出せないほどずっと、仕事、仕事できていた私は、そのときしみじみ思いました。

昔の仕事一筋の自分だったら、紅白に落ちて「人生終わり」ぐらいに考えていたかもしれません。仕事で受けたダメージが、そのままイコール人生のダメージになってしまっていたでしょう。

でも、そのときの私は意外と冷静でした。

落ち込んでいる自分がいる一方で、客観的に受けとめている自分もいました。

なぜなら、当時の私はすでに仕事だけではない人生を知っていたからです。有難いことに家庭という仕事以外の生きがいがあって、そこで得られる幸せというものも経験していたからでしょう。

若いうちは、がむしゃらに仕事をする時期があっていいと思います。けれど、息切れせずに長く仕事を続けていくためには、どこか別世界での生きがいが必要なのかもしれません。

仕事以外の自分をつくること。

それが長く仕事をしていくための防波堤なのかと思います。

第二章

歌うことが何より好きだった

——「歌手・伍代夏子」が生まれるまで

「きっといつか歌手になれる」と信じて

私は三、四歳の頃から歌が大好きでした。

歌にまつわる一番最初の思い出は、母方の祖母の家でよく歌っていたこと。うっすらとしか記憶にありませんが、歌うとアメやお小遣いがもらえたので、それにつられて歌っていたようです。

私の家は、東京の代々木八幡の小さな商店街にある魚屋。魚屋生まれの歌手といえば、美空ひばりさんが有名です。それだけに祖母は、

「この子は声がいい。将来はひばりちゃんみたいに歌手になるかもしれないね」

と冗談を言いながら、いつも私に「歌え」「歌え」と言っていたそうです。

母が美容院に行くときは、必ずついていって、母が髪をセットしているあいだ中ずっと、わんわん唸るようにして歌っていたといいます。

昔のセットは、おかまのようなドライヤーに耳当てをしてすっぽり入ります。そのときは機械音がうるさく、外の音がほとんど聞こえません。母が私のほうを見ると、丸椅子の上に立って真っ赤な顔をして口をぱくぱく。

「また今日も歌ってたのね」

セットが終わってきれいになった母にいつも言われたものです。

小学校の低学年になって、クラスの代表としてＮＨＫの少年少女合唱団のオーディションを受けに行ったことがあります。

各学校から数名の代表者が選出され、オーディションに合格した人は合唱団に入れるとのこと。当時の担任の先生が推薦してくれたのか、私はその代表者に選ばれたのです。その先生の名は、「ヨシカワ　アキコ」先生。祖母の次に、私に歌手になることを勧めてくれた人です。ことあるごとに先生は、「お母さん、お嬢さんを歌の道に進ませた方がいいですよ」と、母に言ってくれていたそうです。

けれど結果は不合格……。

一次、二次は通過したものの、最終審査で落ちてしまいました。

ショックでした。すごく合唱団に入りたかったわけではなかったのですが、自分の歌声を否定されたようで、悔しくて一週間ほど泣き暮らしました。

それからしばらく経ってからのこと。

ある日、少年少女合唱団が出演しているテレビ番組を観ていた母が、

「送り迎えができていたら、輝美も（私の本名です）、ここに入れたのにねぇ……」

と言うのです。どういうことかと訊ねると少年少女合唱団に入るのには親が送り迎えするということが条件だったといいます。

面接で「送り迎えはできますか？」と聞かれ、「できない」と言ったことを話してくれました。

たしかに魚屋を営んでいた両親が日中、送迎できるわけはありません。

その顛末を聞いて少しは気が晴れました。が、それでも落ちるというのは幼な心にも悔しいもの。その悔しさはいまでもしっかり覚えています。

小学校の高学年になった頃は、オーディション歌番組の全盛期でした。

とくに『スター誕生』は大人気。その頃は、親類や友達のお父さんお母さんたちにまで「いつ『スタ誕』に出るの？」と聞かれたものです。それほど歌好きだということが、近しい人の間で知れ渡っていたのです。

こうして、私は幼い頃からたびたび歌が上手だと褒められて育ってきました。

その思いの積み重ねが「自分はいつかきっと歌手になれる」と信じる力を与えてくれたのでしょう。そして、それがのちの長い下積み時代を支えてくれる原動力になったのですから、幼い頃からの思いというのは侮れないものだと思います。

歌本片手に押入れで歌うのが最大の楽しみ

時々「なぜ演歌を歌おうと思ったのですか？」と聞かれることがあります。

自分なりにいろいろと理由を考えてみたのですが、これはもう本能としか言いようがありません。幼い頃、テレビから流れてくる音楽で、私のアンテナにピピッと反応したのが

演歌だったのです。

その昔、我が家には姉が両親にねだって買ってもらったオルガンがありました。

小さい私は、姉がいない隙にいつもそのオルガンをブーブーと鳴らして遊んでいました。

いつも気に入って鳴らしていたのは、黒い鍵盤の音。

いま考えると、それは演歌によく使われる音ばかりです。音階も明るいメジャーコードより、演歌調の悲しげなマイナーコードのほうがちょっとワケありな気がして好きでした。

また、演歌だけはなぜか一、二度聞くだけで、すぐに覚えられました。物心がついたときから、私の体にはこぶしが沁みついていたのかもしれません。

いわゆるカギっ子だった私は、学校から帰るとすぐ外へ遊びに行く姉とは対称的で、家の中で遊ぶのが大好きでした。

小学校に入ってからは、やっと買ってもらったラジカセで、好きなアニメの主題歌などを録音するのに夢中。

同世代なら経験ある方も多いと思いますが、当時、TV番組を録音するにはテレビの前にラジカセを置いて、「録音」と「再生」ボタンを同時にガッチャンと押さなくてはなりませんでした。少しでも気を抜くと「この番組は○○の提供でお送りしました」というアナウンスが入ってしまったり、テープが途中で切れてしまったり。躍起になって、きれいに録音できるまで、毎日同じ時間にTVの前に座り「ガッチャン」を繰り返したものです。

また、当時の芸能雑誌には譜面と歌詞が載った冊子、俗に言う「歌本」が付録としてついていました。その歌本ほしさにお小遣いを貯めて、『明星』や『平凡』を買いました。そして、買ってきたら本誌には目もくれず、歌本片手に押入れに直行。押入れの中で思う存分、大声で歌うのが最大の楽しみでした。

歌っていたのは、演歌はもちろん、アイドルポップスからフォークソングまで、ありとあらゆる曲。天地真理さんや、小柳ルミ子さん、山口百恵さんの曲もありました。後ろのページにいくと、カーペンターズの「イエスタデイ・ワンス・モア」も載っていたりして、バラエティに富んだ歌本は、私にとってプリン・アラ・モードよりも魅力的なものだったのです。

その頃の私の憧れは、八代亜紀さんでした。

あれはたしか、小学校五年生のときのこと。当時、「全日本歌謡選手権」というプロ、アマ合同参加形式のオーディション番組が人気を博していました。なかなかヒットに恵まれないプロ歌手にとっては再起をかける登竜門的な番組で、五木ひろしさんが見事勝ち抜き、スターへの切符を手に入れたのは有名な話です。

その番組に八代さんも出場していました。最初から応援していた私は、八代さんが一週、二週を勝ち抜くごとに、自分の夢に一歩一歩近づいているような気になり大興奮。一〇週達成したときはテレビの前で万歳三唱です。もらい泣きどころか号泣でした。

そんな歌三昧の幼少期でしたが、私はまわりからいくら勧められても歌番組のオーディションを受けようとはしませんでした。

なぜなら、私は人前に出ることが子どもの頃からすごく苦手だったからです。人前で歌っていたのは四歳頃まで。以来、ほとんど歌った記憶はありません。

当時の私にとって、歌が好きということと、人前で歌うということはまったく別のことを意味していたのです。

チャンスは直感でつかむ

人前が苦手だったというと、学校の同級生はみんな「そんなはずはない」と首を大きく横に振るに違いありません。たしかに当時の私は、クラスの学級委員になったり、学芸会でも目立つ役を演じたりしていました。

でも、内心はとてつもない苦しみだったのです。

私は人一倍正義感が強く、おせっかいな子どもだったようです。

いじめっ子にスカートをめくられて、キャーキャーと逃げ惑っている女の子たちが、私の後ろに隠れることもしょっちゅう。体はそれほど大きいほうではありませんでしたが、いつも腕組みをしていじめっ子の前に立ちはだかっていました。

漢字の書き取りテストの最中も、隣の男の子が鉛筆を持ったままボーッとしていると、とっくに答え終わって答案用紙を裏返している私は、

高校二年生、スカウトされた頃

19歳、私のモデル時代

「ほら、点が一個足りない。そこはもう一本横線を引いて」

と、つい口を出してしまうことも。挙句に「もう、貸しなさいよ」と、人の答案用紙を取りあげて代わりに答えを書いてしまったこともあったようで、うちの母はそのたびに学校に呼び出されていたと話してくれました。

そんな性格だからでしょうか、みんなのまとめ役が回ってくることも一度や二度ではありませんでした。私も頼まれたらイヤとは言えず、やるとなったらしっかりやろうとする。だから余計に適役だと思われてしまい、そうして次から次へといろんなことを引き受けさせられるハメになるのです。

でも、本当は逃げ出したいくらいイヤでした。

発表会の前日などは、「明日、台風で学校が休校にならないかな」と真剣に願ったり、体温計をこすって摩擦で温度を上げようとしてみたり。なんとかやらなくて済む方法はないかと一生懸命考えたものです。

だから、オーディションに出るなんてとんでもない。

歌手になりたいけれど、人前には出たくないという裏腹な気持ちの狭間で、私はずっと葛藤していました。

そんな私に、運命の日が訪れます。
それは、高校生になったある日のこと。
友人と渋谷で待ち合わせて公園通りを通りかかると、野球帽にサングラス、首には一眼レフをぶらさげて、道行くOL風のきれいな女性に片っ端から名刺を配っている人がいました。
（あの人はスカウトマンに違いない）
私はとっさにそう確信し、思ったのです。
（いまここであの人にスカウトされなければ、私は一生歌手にはなれないだろう――）と。
理由もなくそんな直感が働いたのです。そして、一大決心してその人の前を思いっきり目立つようにすまして歩いてみました。
ところがそのときの私たちといえば、ぶかぶかの制服姿にほっぺはタコ焼きみたいに真ん丸でまるでイケてません。一回目は完全に無視です。
でも、ここで引き下がるわけにはいきません。
五分後にもう一度。一〇分後に人待ち顔でもう一度。

何度行き来をしても、まったく見向きもしてくれません。私も半ば意地になり、わざとらしく三〇回くらい行ったり来たりを繰り返したでしょうか。日が暮れかけた頃になって、「しょうがないな」という顔でやっと名刺を一枚くれたのです。
その名刺には名の通ったモデル事務所の名前が書いてありました。
これで歌手への道が開けるかもしれない。そんな思いで、私は後日その事務所の門を叩きました。
「あなたは背も高くないし、モデルには向いていないわね」
私のことを見るなり、モデル事務所の人は言いました。
「お芝居はできるの？」
と聞かれ、私はキッパリと、
「夢は演歌歌手です！」
と正直に答えました。すると、すぐにボイストレーニングの先生を紹介してくれたのです。私は喜んで、レッスンに通い始めました。
それから間もなくして、ラッキーなことにたまたまレッスンを見に来ていたあるレコー

ド会社のディレクターの目にとまり、レコード会社でレッスンしていただけることになりました。こうして、私は晴れてデビュー予備軍となったのです。

憧れの八代亜紀さんのもとへ

その人は、なんとあの八代亜紀さんのディレクターさんでした。

レッスンは、自らピアノを弾き歌いながら教えるという方法。歌も驚くほど上手でした。小気味よくコロコロとよく回るこぶしに、「間」や「タメ」、「息遣い」といった技がちりばめられ、その歌にはただ単に上手というだけではない、何か特別なものを感じます。そうして実際に通用する技を初めて目のあたりにし、私はますます演歌の世界へのめり込んでいきました。

そんなレッスンが数カ月続き、大人の世界に少し慣れた頃です。ディレクターさんからこれから設立する新しいレコード会社へ一緒に来ないかとお誘いを受けました。聞けば、

デビュー前から憧れていた、八代亜紀さん

八代さんもそちらへ移籍するとのこと。
「行きます！　よろしくお願いします！」
まだ憧れの八代さんにお目にもかかれもせず、ディレクターさんのレッスンも続けたかった私は当然二つ返事で答えました。
それからしばらくして、やっと訪れた八代さんとお目にかかれる日。
緊張で声も出ない私をあのブラウンの瞳でやさしくまっすぐ見つめて、こう言ってくださったのです。
「一緒にがんばりましょうね」
「がんばってね」ではありません。「一緒にがんばりましょうね」です。「ああ、この方のファンでよかった」と思った瞬間でした。

一九八二年、私は「星ひろみ」という名前をつけていただき、『恋の家なき子』という曲で、とうとうデビューを果たしました。
発売元はセンチュリーレコード。所属事務所は、一番初めにボイストレーニングのレッスンに通っていた会社です。

1982年「星ひろみ」としてデビューした頃

私をスカウトしたディレクターさんは、当然、私がその事務所に所属しているものと思い、デビューの話はどんどん進んでいきます。

アーティストにとって、どのプロダクションに所属するかはとても重要な問題なのですが、右も左もわからない私は、ただなりゆきのまま契約書に判を押したのです。

その事務所には有名人のポスターがたくさん貼ってあり、この人達が所属しているなら、と、安心しきっていました。しかし、この事務所は私の思っていたところとは、ずいぶん違っていたのです。

どん底からのスタート

私が所属した事務所は、実際には業界で「ハコ屋」と呼ばれているところでした。

ハコとは、キャバレーやクラブなどの実演を行える屋内施設のこと。ハコ屋はそのハコにタレントを斡旋する単なる仲介業者です。事実、その事務所に所属しているタレントは

ひとりもいませんでした。

デビューしたての仕事は、夜のスナックでのキャンペーンです。

人手不足のため、社長が運転する車で向かうこともしばしば。到着駅に迎えが来ているからと列車の切符を渡され、一人で地方キャンペーンに行かされたこともありました。

迎えにきていたのは、いかつい顔のお兄さん。大きなアメ車の車内はギンギラの電飾でまばゆいばかり。しかも、連れていかれたところは、さびれた建築現場の飯場でした。

作業員の皆さんでつくったのでしょうか、壁は色とりどりの折り紙でつくった輪っかの鎖で飾られています。キャンペーンかと思いきや、作業員の皆さんのクリスマスパーティーの余興要員だったのです。

おじさんたちの怖い顔つきと、折り紙の楽しげな輪っか。

その落差におののきながら、「このままどこかへ売り飛ばされてしまうんじゃないか」と本気で思いました。

また、北国のとある街へキャンペーンに行ったときのこと。

そこはカウンターだけの小さなお店。お客さんが七人も座ればいっぱいで、その後ろを

やっと人が通れるぐらいのウナギの寝床のような空間でした。
ママさんに「上で着替えてね」と言われ、奥の急な階段を上がっていくと、従業員の仮眠室でしょうか、四畳半ぐらいの畳の部屋がありました。そこにはピンクのガウンを着た、うんと年配の女性が一人。
「お先に〜」
と言って、すれ違いで階段を下りていきました。「何をやるんだろう」と思った私は、メイクをして髪を巻きながら、そーっと階下をのぞき込みました。
すると、さきほどの女性が鏡張りのカウンターの上を音楽にノッて、くねくねと歩いています。驚いたことにガウンの下には何も身につけていません。あろうことか、私のキャンペーンの前は、ストリップのショーだったのです。
脱ぎもしない女の子が歌っても、誰も真剣に聞いてはくれません。白けた空気の中、ただ歌うしかない私。舐め回すような視線に耐え、それでも何とか笑顔で歌い切り、そそくさと店を出ました。
肌寒く、真っ暗な帰り道。星空を仰ぐと、こらえていた涙があとからあとから溢れ出てきました。

この頃はデビューとは名ばかり。本来の芸能活動とはほど遠い日々でした。
しかし、そんなつらい日々にもある日突然終わりが訪れます。
レッスンのために事務所へ行くと、何もかもがなくなって、もぬけの殻になっていたのです。
借金に追われての夜逃げでした。

こうして仕事らしい仕事をしないまま、私の歌手活動はたった四カ月で終わりました。
けれど、私はなぜかとてもほっとした気分でした。この四カ月、誰にも隙を見せちゃいけないと常に気を張っていました。そんな体験をして、人前で歌うことがますます苦痛に思えてきていたのです。
歌は大好きだけど、歌手という職業は私には向いていないのかもしれない。
そう思い始めた矢先、心配したディレクターさんがレコード会社で働いてみないかと誘ってくださいました。
人前が苦手でも、歌に携わることができるなら裏方としてがんばってみよう。

私はそんな思いでＯＬとして働くことを決意しました。

三度目の正直で見えた光

このときのレコード会社での勤務はとても有意義なものでした。

一人のアーティストは、大勢のスタッフに支えられているということや、たくさんの人の汗と努力なくしては一曲のヒット曲も生まれないということを、私はこの時期に学ぶことができたのです。

ＯＬ生活は意外と楽しく私の仕事ぶりもだんだんと板についてきました。経理が留守にするときは少しですが現金の出納を任せてもらえるようになり、周辺の安くて美味しいランチのお店にも詳しくなりかけた頃です。私に再びレコードを出す話が持ち上がりました。

何でも、元プロ野球選手の平松政次さんのデュエットの相手を探しているというのです。

1985年「加川有希」として再デビュー

夜のスナックキャンペーンが多かった時代

「星ひろみ」で撃沈してから二年ちょっとの空白期間。
トラウマは癒えつつあるものの、人前嫌いが克服されていたわけではありません。でもこのチャンスに背を向けたら私は一生後悔するに違いない。考えた末、私はもう一度がんばってみようと決意しました。
すべてはいまから始まるのだと……。

一九八五年。私は「加川有希」という芸名をつけていただき、平松政次さんとのデュエット曲『夜明けまでヨコハマ』をリリースしました。
事実上のデビューです。
加川有希という名前は、スタッフが一生懸命考えて、「希望が有るように」とつけてくれたものでした。しかし、がんばってはみたものの鳴かず飛ばず。まったく売れませんでした。あとから、文字をひっくり返したから「希望がなかったんだろう」なんて笑い話になっています。
翌年には「中川輝美」と改名し、『夢きずな』を発売。
このときから衣裳も念願の着物になり、本格的な演歌を歌わせていただけるようになりました。
そして一九八七年。センチュリーレコードから、CBS・ソニーレコード（現ソニー・ミュージックレコーズ）へ移籍。
「伍代夏子」の誕生です。

ニックネームは「手売りの女王」

伍代夏子として『戻り川』を発売した一九八七年前後の演歌市場は、いろいろな意味で変動の年だったように思います。
レコード盤からカセットテープへ。
歌を聴く時代から、カラオケで歌う時代へ。
そして、その時代の流れに合わせるかのように、「夜キャン」と呼ばれていた夜のスナックキャンペーンは衰退し、キャンペーンの場所もレコード店の店頭やカラオケ愛好会が

集う個人宅や公民館などの明るく健全な場所へと変わっていきました。

演歌のキャンペーンは、いわば行商のようなものです。

演歌しか置いていないような小さなレコード屋さんの社長さんが「呼び屋」になります。そして、そのレコード店の店頭はもちろん、社長さんが話をつけてくれたありとあらゆる所で歌い、レコードを買っていただくのです。

八百屋、魚屋、美容院……。温泉施設の休憩所やカラオケ喫茶など、ステージや音響設備があるところは天国でした。

キャンペーンをする街に到着したら、まずはレコード屋さんのお宅などを借りて身支度を整えます。着物で歌う歌手のほとんどは、こういった場面でヘアーメイクや着付けの腕が磨かれていきます。

一カ所で歌うのは四、五曲。

新曲とカップリング曲、間に数曲誰もが知っている演歌のスタンダードな曲や最近のヒット曲などをはさんで、もう一度新曲。そんなパターンで歌い終わるやいなや即売に移ります。

ここはスピードが勝負。観客の興奮がまだ冷めやらぬうちに、レコードをお勧めしなけ

「伍代夏子」の誕生。

『戻り川』ヒット！

ればいけないからです。そうでなければ、チケットを買ってきたわけでも、着席しているわけでもないお客さんはすぐに立ち去ってしまいます。

サイン色紙に宛名を書き入れたり、一緒に写真を撮ったり、一カ所に費やす時間は四〇～五〇分ほど。衣裳は着た切りスズメで、車か徒歩で移動します。あんパンをかじりながら、一日に五、六カ所。多いときでは七、八カ所にもなります。

最後はいつもファミレスで、レコード屋さんとマネージャーが、その日の売り上げの計算をするのがお決まり。すべて終えて帰宅するのは、いつも深夜でした。

たしかに過酷な毎日でしたが、それまで主流だった夜のスナックキャンペーンにくらべたら、精神的にはとても楽でした。

夜キャンは酔客が相手なだけに、嫌な思いをしたことがたくさんあります。

なかでも極めつけだったのは、クラブでホステスさんを三、四人はべらせた、いかにも成金風の社長（？）さん。

歌い終えた私がお席まで行くと、「注げ」とグラスを差し出します。仕方なくビールを注ぐと、隣に座っていたホステスさんが

「社長～。レコード、買ってあげなさいよ～ん」

と勧めてくれました。すると鼻の下をながーく伸ばした社長は、

「よしよし、じゃあ全部オレが買ってやろう。みんな置いていけ」

と言うではありませんか。

「なんていい社長なんだ」と喜んだのも束の間。その人は、私のレコードを袋から出して、フリスビーのように投げ始めたのです。呆然自失で、そのときは、

「あ～あ。これから値打ちが出るのになぁ～」

と冗談めかして言うのが精いっぱい。それでも笑顔は絶やしませんでした。

泣きたいくらいの悔しさ、はらわたが煮えくり返るくらいの怒り。

そんな思いをグッと飲み込んで、私は笑顔でキャンペーンを続けました。来る日も来る日も、まるで修行のように。

この頃についたあだ名は「手売りの女王」。

キャンペーンは、私の喉も精神も、随分と鍛えてくれたと思います。

どこにいてもホームをつくり出す

ステージといえば、お客さんが数人しかいないうらぶれたスナックか、寒風が吹きすさぶレコード店の店頭でミカン箱の上。そんな小さなところから歌い始めて、少しずつ少しずつ、大きなステージで歌えるようになっていきました。

あの渋谷の公園通りを行ったり来たりした日から、日の目を見るまで一〇年近く。

ずいぶん時間がかかりました。けれど、私にはこの下積みの時間が必要だったと思います。もし急にブレイクでもしていたら、私の神経はあっという間に壊れてしまっていたに違いありません。

私のあがり症は、伍代夏子としてデビューした当初も克服できてはいませんでした。

ステージに立つと、声が震えて思ったように歌えない。

練習のときはもっとうまく歌えているのに、どうして大事なときにうまく歌えないんだろう。

今度こそはと思えば思うほど、肩に力が入って余計にうまくいきません。

当時出演していた番組を見ても、情けないぐらい声はひっくり返っているわ、笑顔が引きつっているわで、いいところをみつけるのが大変です。そんな自分の情けない姿を見てはさらに自己嫌悪に陥り、どんどん自信をなくしていきました。

やがてステージの時間が近づくと、胃がムカムカして気持ちが悪くなるようになりました。ふと、気づけば後頭部には円形脱毛症まで……。

仕事をするたびに体調が悪くなり、まともなステージができない。なんでできないのかと思って、へこむ。そしてまた体調が悪くなる。そんな悪循環にがんじがらめになって、どうにも脱け出せなくなっていました。

どうしたら人前でも平常心でいられるようになるんだろう。

書店へ行き、自律神経の訓練法や自己暗示の本を手当たり次第に買い漁り、解決法を探す日々が続きました。

そんな中、時期を同じくして二度、似たような出来事がありました。

最初は、三重県へキャンペーンに訪れたときのことです。
出番を前に、私はお店の事務所のデスクを借りて支度を始めました。窓のブラインドの隙間から、これから私が立つ特設ステージを見ると、一人、二人とお客さんが集まってくるのが見えます。
ステージの横には「伍代夏子　キャンペーンショー」という貼り紙。
メイクをしながらチラチラと外の様子をうかがっていると、さらにお客さんがやってくるのがわかりました。お客さんが五〇人くらいにはなったでしょうか。私の胃袋がまたシクシクと痛み出します。
イントロが鳴り、私はふぅ〜っと大きく息を吐いて、ステージへ出て行きました。そして『戻り川』を歌い出すと、どこからか掛け声が聞こえてきます。
歌いながら耳を澄ませると、「輝美〜」と叫んでいます。輝美は私の本名。そして前年までの私の芸名でもあるのですが、その呼び方は芸名を呼んでいるようには聞こえません。
「このあたりに知り合いなんていないのに、誰だろう」と思いながら歌っていると、一人の初老の男性がステージに近づいてきました。
その人は、立派な水引を付けた祝儀袋を私に渡しながら言いました。

「俺はおまえのおじさんだ。応援してるぞ」
まったく見覚えのない顔でした。
不思議な思いで歌い終え、控室に戻ると、マネージャーが小声で「さきほどのご祝儀をくださった親戚の方が見えていますよ」と言います。心当たりがなかったので家に電話して聞いてみると、なんとその人は本当に私の大叔父さんだったのでした。
二度目は、それから少しあとに福島県へ行ったときのこと。
楽屋でメイクをしていると、マネージャーがやってきて、「△△さんという親戚の方が五人ぐらいでお見えです」と言います。
このときも、全く心当たりがなかったのですが、
「お母さんにそっくりですよ」
とマネージャーが言うので楽屋に来ていただくと、その人たちは本当に母にそっくりです。それもそのはず、母のいとこたちだったのです。
そして幕が開き、歌い出した私は客席に親戚たちの顔を見つけました。彼女たちは、母にそっくりな顔でニコニコと手を振ってくれています。私も振り返しました。すると、親

戚の隣に座っていたお客さんまで手を振り出したのです。そこで、その人にも振り返すと、そのあたり一帯の皆さんが手を振り出し始め、どの人が親戚だったのかわからなくなりました。

お客さんの顔が、なんだか全員母親の顔のよう。

気持ちが和んだせいか、ふっと肩の力が抜け自分でも驚くほど楽しくステージを終えることができました。

私が知らないだけで、この世には私の親戚がたくさんいるのかもしれない。

あの人も、この人も、遡ればみんな遠い親戚かもしれない。

そう思うと、とても気が楽になりました。と同時に思ったのです。

だったら、会場のお客さん全員を親戚だと思えばいい。

以来、こちらから進んで手を振りリラックスするように心がけました。するとおもしろいもので、お客様の反応もどんどんよくなっていきます。以前とはまるで反対の、好循環が生まれるようになったのです。

こうして私はやっとお客様との一体感が味わえるようになり、人前に出る恐怖症から、わずかですが解き放たれることができたのです。

涙が止まらなかった紅白初出場の記者会見

一九九〇年。ようやく私は悲願だった紅白歌合戦へ初出場することができました。

曲名は『忍ぶ雨』。伍代夏子としてデビューしてから三枚目のシングルです。

全国のレコード店で店頭キャンペーンを大々的に展開し、約一〇〇店舗を訪問。また、「生(なま)うた宅配便」と銘打って、抽選で当たった方のお宅へ歌をお届けしたりと、一日も休まずにキャンペーンに明け暮れました。

アスファルトから陽炎がたつような真夏の炎天下でも、着物の後ろ衿(えり)に雪が降り積もる極寒の地でも、雨の日も、風の日も、キャンペーンを続けました。

その甲斐あってか、『忍ぶ雨』は私の最大のヒット曲となり、紅白へ出場することができたのです。

紅白の出場者の発表は例年一一月の下旬。発表の当日は、ＮＨＫから所属レコード会社に出場決定の連絡が入ります。そして、レコード会社からそれぞれの所属事務所に連絡があって、初めてアーティスト本人が出場の知らせを受け取るのです。

私もマネージャーからの電話で出場を知りました。受話器を取ると、耳にあてる前から聴こえてきた「おめでとう！」の叫び声。

歓喜、安堵、放心……。まさに万感胸に迫る思いでした。

受話器を置くと、喜びに浸る間もありません。急いで支度をして、夕方から開かれる記者会見に出席するためＮＨＫへ向かわなければならないからです。

やった、出られる。やっと、出られる――。

記者会見の間、私はそう思いながらずっと泣いていました。

出場者は一人ずつ御挨拶をすることになっています。私の番が来てマイクが渡され「いい親孝行ができます」と言おうとした瞬間、涙がさらに込み上げ、語尾は嗚咽でかき消されました。

テレビという箱の前に座り、小さい頃から憧れてきた番組。歌手を志してからはずっと目標にしてきた番組です。

それだけに感慨もひとしおでした。

発表の翌日、我が家の電話は朝から鳴りっ放しです。生まれ育った代々木八幡の商店街にはお祝いの垂れ幕がかかり、うちの店の前には大きな花輪がパチンコ屋さんの開店祝いのようにいくつも届けられました。

こんなにたくさんの人が喜んでくれている、みんなが応援してくれているんだ、泣いてなんかいられない。

そう思うと余計に涙がこぼれてきました。

この数年、「泣いてたまるか」とがんばってきた私の涙は、ずいぶんと溜まっていたのでしょう。紅白初出場決定のお知らせを受けた日からポロポロと止まらなくなりました。

そんな私に親友の冬美ちゃん（坂本冬美さん）がこう言ったのです。

「夏っちゃん、いまからそんなことでどうするの？　本番ではぜったい泣いちゃダメよ！せっかく出られるのだから、絶対に泣かないでしっかり歌うのよ！」と。

「わかった。約束する」

男と男の約束でした。

そして、いよいよ迎えた一九九〇年、一二月三一日、本番のステージ。

ＮＨＫホールの舞台に立った私は意外に落ち着いていました。と言うより、全然平気なように思えました。

胃も痛まなければ、ドキドキもしていません。ところが「私もたくましくなったものだなぁ」と思い、音響さんからマイクを受け取った瞬間、私の記憶は飛びました。

頭が真っ白になるとはこのことでしょうか。歌っている間の記憶がまったくないのです。落ち着いているなんて、とんでもありません。あがっていることにも気づかないほどあがり過ぎていたのです。

歌い終わって舞台の袖に戻り、マイクをお返ししたときにやっと我に返りました。途端に膝がガクガク震え出し、堰を切ったように涙があふれ出てきます。ふと見ると、冬美ちゃんがいました。私が歌っている間中、袖から見守っていてくれていたのです。

「夏ちゃん、良かったよ。バッチリだったよ」

そう言ってくれた彼女の瞳も潤んでいるように見えました。

家に帰り、ＶＴＲを見て、初めて紅白に出たんだという実感が湧きました。

『忍ぶ雨』で念願の紅白初出場。涙が止まりませんでした

テレビに映る私の姿は、「これ、だれ？」と思うほどにこやかで落ち着いて見えます。このとき、記憶がなくなるほど舞いあがっていたなんて、誰が思うでしょう。けれど、ステージ上の私は、いつもやっていることを条件反射でやっていただけです。このときほど、何度も繰り返し人前で歌ってきてよかったと思ったことはありません。

舞台やスポーツ、プレゼンなど何でも同じだと思いますが、人前で何かをするとき「失敗したらどうしよう」「恥をかくかもしれない」と思うと不安がどんどんふくらみます。そして、いつもはしないような失敗を招き、余計に緊張してしまう。そんな経験をしたことがある人もきっと少なくないでしょう。

晴れ舞台でまったく「緊張しない」というのは土台、無理な話。

「緊張しないように」と自分に言い聞かせたところで、かえって緊張してしまうのが関の山です。それならば、極度の緊張状態でもふだんの力が出せるよう、ベストのパフォーマンスを繰り返し繰り返し、体に覚え込ませればいいのです。そうすれば、いくら緊張していても自分の意識とは関係なく、体が自然に動いてくれるのでは、と思います。

これは、私がおそらく人生で一番緊張したであろう晴れ舞台で、身をもって学んだことです。

第三章

演歌に込められた思い

運を引き上げるのは自分

世の中には運のいい人と、そうでもない人が確かにいます。

自分は運が悪いと思っている人は、運のいい人をうらやましく思うことでしょう。でも、人から運がいいと思われている人でも、自分では運がないと思っているかもしれません。何をもって良しとするかは、その人次第です。運はその人の心構え次第で良くも悪くもなる。私はそう考えます。

駆け出しの頃の私は、

「力の弱い事務所に入ってしまうなんてツイてない」

「もっと自分に合う歌をつくってほしい」

などと、自分がうまくいかないのは運が悪いせいだと思っていました。

たしかに最初に入った事務所では、つらい経験をしました。どうすればいいのかわからないまま、誰のことも信用できず、ただ身を固くして虚勢を張っていました。

しかし、最悪の経験をしたということは、未来に目を向ければ、もうこれ以上悪くなりようがないということ。

スタートでどん底と思われる経験をした私は、ほんの少しでもいいことがあると、それが大きな励みになりました。そして毎日少しずつですが、いい方向に向かっていると実感することができました。

そのおかげで、一つひとつ前向きにステップを踏めたのは本当に幸いだったと思います。

いまにして思えば、加川有希としてデビューしたときが転機だったように思います。

どんな名前が私に合うかを、スタッフみんなで考えてくれました。ジャケット写真の撮影では、予算がなく衣裳も買うことができない私に、レコード会社のスタッフが奥さんや娘さんの洋服を借りてきてくれたこともありました。

そこまでしてもらって、私ががんばらなくては申し訳が立たないという気持ちが自然と芽生えたことも確かです。レコード会社での勤務で、裏方の苦労も十分知っていました。

この歌は自分ひとりの歌ではない。

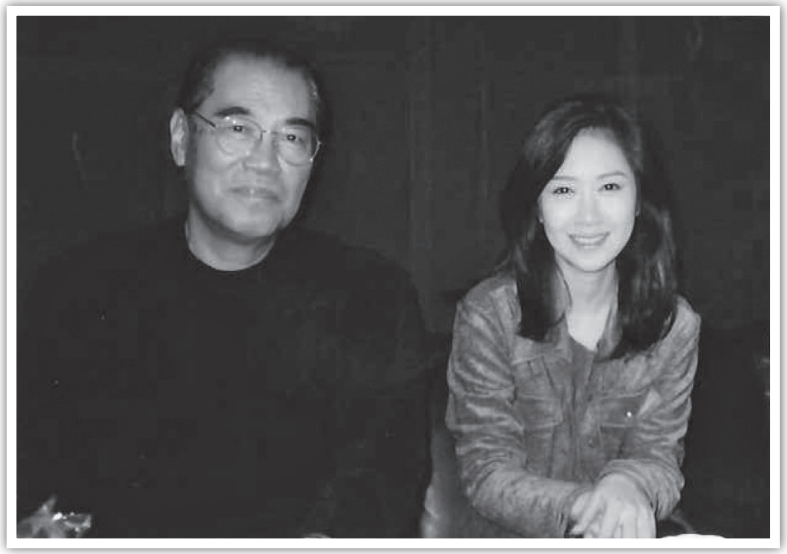
そう悟ったときから、私は一生懸命努力することを厭わない人間になりました。
地方のレコード店を一軒、一軒、キャンペーンに回って、一生懸命歌い、頭を下げる。そうして全国を歩き回るうちに、少しずつ応援してくれる人が増えていきました。
おもしろいもので、「あそこのレコード屋にも紹介してあげようか」という人が一人現れると、次々と似たような人が現れます。そうしてどんどん輪が広がっていきます。前向きに一生懸命がんばっていると、不思議とやさしい人たちばかりが集まってくるのです。
まわりは悪い人だらけだと固く心を閉ざしていた頃。それは、自分にも原因があったのです。

結局、自分の運を引き上げるのも、下げるのも自分の心構え次第。
何事も前向きに明るく考え、そして諦めずにやり続けること。
運を切り拓くための道は、そこからしか始まらない、というのが私の信条です。

私にとって一番大切なこと

この本のはじめに、新しい歌をいただくと真っ先にすることは「歌に出てくる女性をイメージすること」だとお話しましたが、演歌を歌う上で役作りはとても大切です。
それは歌に魂を吹き込むことであり、私にとっては必ず行う儀式のように確固たるものです。
こうした歌い方へのこだわりは、作曲家の市川昭介先生の指導を受けたことから始まりました。
私は「伍代夏子」と改名する前、何度か別の名前でレコードを出していたのですが、一向に鳴かず飛ばず。なかなかヒットに恵まれず、暗闇の中をさまよっているような日々でした。
そんなとき、市川先生に出逢い、指導していただけることになったのです。その嬉しさは言葉ではいいあらわせないほどです。

市川昭介先生



吉岡治先生

こんなチャンスは二度と来ない。何としてでも先生が教えてくださることを必ず体得するのだ。

私は心に日の丸のハチマキを固く締めて、市川先生宅の門を叩きました。

それまでも、いろいろな先生から歌のレッスンを受けてきましたが、市川先生の教えは、どの先生とも違いました。

大半の先生は「言葉がはっきりと聞き取れるように歌いなさい」と教えます。歌詞がちゃんと聞き取れないといけない。だから、「滑舌をよくしなさい」「朗々と歌いなさい」「声を張りなさい」と。

でも、市川先生はまったく逆でした。

「たどたどしくていいんです」

「ささやきなさい」

「下手でいいんです」

ふつうなら「プロの歌手が下手でいいわけがない」と思いますよね。でも、うまく歌うだけなら素人にもできます。単に歌がうまいだけの人なら星の数ほどいるのです。

スターになる人と、歌のうまい人とはどこが違うのか。
歌い手としてやっていくために、もっとも大切なことを市川先生は教えようとしていたのです。

想像力が説得力を生む

市川先生の初めてのレッスン。その衝撃を、私は一生忘れることはないでしょう。
お宅に私が着くなり、先生は、
「じゃあ、君の声を聞いてみようか。音域も知りたいから、何か適当な曲をちょっと歌ってみなさい」
と言いました。
私はきっとそう言われるだろうと思い、市川先生が作曲した『大阪しぐれ』をあらかじめ用意していました。

『大阪しぐれ』はご存知の通り、都はるみさんの代表曲。私はふだん、あまりカラオケには行きませんが、行ったときには必ずといっていいほど歌う大好きな曲です。私の十八番で、人より多少はうまく歌えるという自信もありました。
「『大阪しぐれ』でお願いします」
先生のピアノで、いざ、レッスン開始です。
「ひと〜り〜で」
最初の一小節を歌ったところで、ピアノを弾く先生の手がピタリと止まり、
「違うな、もう一回」
そう言って、先生はもう一度イントロから弾き始めます。
「ひとぉ〜り〜で」
「違う、はい、もう一回」
「ひとおおりぃ〜でぇ〜」
「違う、もう一回」
強く歌ってみたり、やさしく歌ってみたり。私はいろいろな歌い方をしてみました。けれど何度やっても、「違う」、「違う」、「違う」ばかり。

どうしていいかわからないけれど、やめるわけにもいかない。躍起になって「ひとりで」のフレーズを繰り返す私。何十回か、同じやりとりを繰り返したあとです。

先生が突然、

「あ、いまのはちょっと近いかな」

と言いました。

え、これがＯＫなの？

どこがどう近いの？

私の頭の中は疑問符だらけです。でも先生は、理由までは教えてくれません。多くの謎を残したまま、初日のレッスンは終わりました。

帰りの車の中。

マネージャーにさっきまでのレッスンの様子を録音したテープをかけてもらい、聞きながら帰りました。しかし、繰り返し何度聞いても先生の「違う」と「ちょっと近い」との違いがわかりません。仕方なく「ちょっと近い」と言われたときの声の音色や抑揚を体に叩き込むことにしました。

そして、迎えた二回目のレッスン。

「ひとりで～」

先生は何も言いません。

「やった。無事、通過できた」と思ったのも束の間。次の「生きてくなんて…」というフレーズを歌った途端、

「違う、もう一回」

（またか……）

ある程度予想はしていましたが、やはり「違う」攻撃がまた始まったのです。

よーし、こうなったら、とことんやってみよう。

生来の負けん気がむくむくと湧いてきました。

ＯＫが出るまで、次の歌詞を歌わせてもらえない。おまけに、ＯＫの理由はいつまで経っても教えてもらえない。そんなレッスンを何度繰り返したことか。

レッスンの行き帰りの車中は毎回、復習時間と化しました。二時間分のレッスンを録音したテープの声にどっぷり浸かって、歌い方を頭に叩き込む。

そして、次のレッスンでは「よし、次のところまで歌えた」。
また次のレッスンでは「やっとここまで来た」。
気の遠くなるようなレッスンを重ねて重ねて、次第に歌うフレーズは長くなっていきました。
ようやく一曲通して歌えるようになった頃のこと。先生が私にたずねました。
「どこがよくなったか、わかる？」
私は首を横に振りながら答えました。
「わかりません。ただ、ＯＫが出た歌い方をまねしているだけです」
すると、
「この歌の女性は『一人で生きていくなんてできない』と、男にすがる人なんだよ。あなたなしでは生きていけないという女性なんだ。だから『ひとり』と歌い出したそばから『ひとりで生きられない』女性を連想させないとダメなんだ」
そして極めつけの一言。
「君の歌う『ひとり』は『一人で生きられる』女性しか連想することができないんだよね……」

まさにその通り。さすがに市川先生はお見通しでした。
私は男性に頼るなんて、これっぽっちも考えていませんでした。その頃、独身だった私は「ずっと一人でいいや」と心の中で思っていましたから、まさにその気持ちが歌にも現れていたのです。

そのとき、初めて気づきました。
先生が問題にしていたのは、歌の説得力だったのだ、と。
そして、その説得力こそが私に欠けていたのです。
心の中で「一人で生きられる」と思っているのに、うわべで「一人で生きられない」と歌ったところで説得力はありません。歌い手が本気でそう思って歌っているかどうか、聞き手は無意識のうちに感覚で見抜いてしまいます。
逆にスターの歌というのは、無条件に「ほんとうに、そうなんだ」と聞き手に信じさせる力があります。そうして、聞いている人はぐいぐいとその歌い手が繰り広げる世界に惹き込まれていくのです。
では説得力はどうしたら生まれるのか。

それは、歌い手が歌詞の言葉一つひとつに寄り添い、心を込めることです。そして自分の言葉として発すること。そのためには、歌い手の想像力は欠かせません。

いかに歌詞の世界をリアルに思い描くことができるか。

そして、その思い描いたものを、ほんの少しの言葉のニュアンスや表情の違いによって表現できるかどうか。

それがただ歌のうまい人と、スターと呼ばれる人との決定的な違いだと思うのです。

かすれた声のほうが色っぽく聞こえるようになるなら、そうしたほうがいい。

ゆれ動く心を表現するためには、言葉尻を濁したってかまわない。

聞こえるか聞こえないか、聞き耳を立てるくらいのほうが、より伝わることもある。

私は、それまでの歌い方をすっぱり捨てて、死にもの狂いで市川先生の教える歌い方を習得しました。

そうして、これまでとはまったく違う歌い方に変え、初めてヒットしたのが『戻り川』でした。

ヒットは寝て待つ

デビュー以来、私は一年に約一作のペースで新曲を発表してきました。

私の場合、新曲をつくるときはたいてい方向性の違うものを二曲ほど同時に制作しています。一曲が一途な愛を描いた古典的なものであれば、もう一曲は冒険的なもの。そんなふうに趣向を変えた二曲を用意します。

どちらがタイトル曲になるかは、レコーディングの仕上がり次第。

途中までこちらの曲がメインになるだろうと思っていても、最終的な段階でもう一方に変わることもあります。また、二曲とも甲乙つけがたく決めかねるときは、片方の曲を発表せず、次回作候補としてしばらく寝かせておくこともあります。

たとえば、一九九六年にリリースした『鳴門海峡』。

この曲は、一九九四年発売の『ひとり酒』をつくっていただいたときに一緒にできてい

た作品です。

作曲者の水森英夫先生が歌うデモテープで、初めてこの歌と出合ったとき、私の左腕にはザワザワと鳥肌が立ちました（素晴らしい曲に出合うと、なぜかいつも左に鳥肌が立つのです……）。

未練と諦めが入り混じる複雑な思い。

そして見えてくるのは船、カモメ。

次から次へと情景が浮かんできます。歌い手なら、一度は挑戦してみたいと思うような難しい楽曲でした。

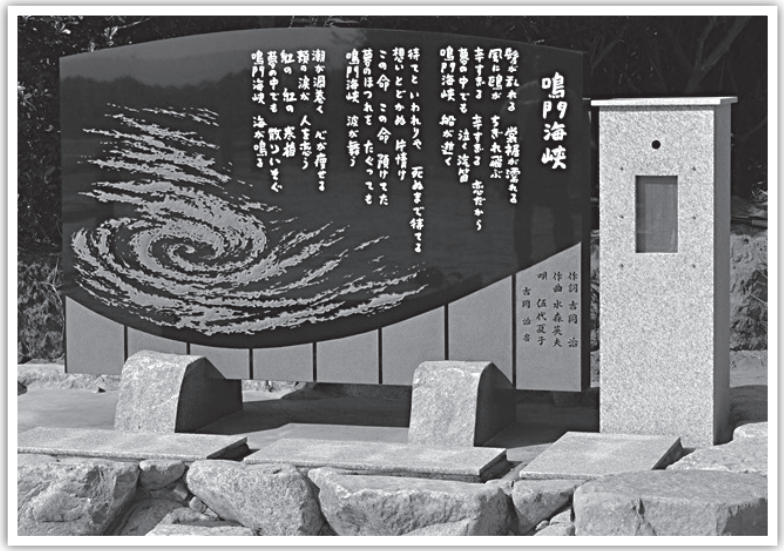
一方の『ひとり酒』は、明るく、とても親しみやすい作品。発売すれば必ずヒットするだろうと思われる楽曲でした。

どちらもすばらしい作品。

ディレクターやスタッフ一同で会議を重ね、悩んだすえに、その年の新曲は多数決で『ひとり酒』に決まりました。そして、『鳴門海峡』は翌年までお取り置きしてもらうことになりました。

鳴門海峡を挟んで建立された2つの歌碑

兵庫県南あわじ市



徳島県鳴門市

一年が経ち、おかげさまで『ひとり酒』は三〇万枚を突破。
この勢いに乗って、さあ、『鳴門海峡』の出番ですよ！　と意気込んでいるところへ、なんと、水森先生がまた新しい曲をつくってくださいました。
タイトルは『女のひとりごと』（一九九五年発売）。好評だった『ひとり酒』の続編とも言うべき作品でした。
私は思わず尋ねました。
「センセイ、『鳴門海峡』はいつ出すんですか？」
すると、先生は、
「あ～、あの曲は暗いから売れないかも……。夏ちゃんには明るい歌が似合うよ！」
と言うのです。
そんな～。あの時は「夏ちゃんのためにあるような歌だ」と言っていたのに……。
その後も、なかなかタイミングがあわず、『鳴門海峡』は結局、完成してから三年目にしてようやく発売することができました。
途中、アルバムに収録するというお話もあったのですが、それは断固阻止。いつもは多

数決や会議の決定に従う私ですが、このときばかりはかなり無理やり意見を通させていただきました。
結果、売れ行きは絶好調。私の代表曲となりました。
私の「鳥肌」は、けっこう当たるのかもしれません。
寝かせていた曲といえばもう一曲。『金木犀（きんもくせい）』も二年ほど寝かせていた楽曲です。
発売は二〇〇六年の元旦。プロモーションがなかなか仕掛けにくい時期なので、キャンペーンも世の中のお正月気分が抜けてから始めようと思っていた矢先、レコード会社の方から「ジワジワと店頭から売れてますよ」との嬉しい知らせ。
まだろくに宣伝もしないうちから売れ始めたのです。あわてて全国キャンペーンを開始したのは言うまでもありません。
おかげさまで『金木犀』もヒット。
その年の暮れには、四年間出場していなかったＮＨＫ「紅白歌合戦」に返り咲くことができました。

以来、スタッフの間では「寝かせた曲って、結構イイかも…」という話になっています。もちろん、歌はワインのように熟成してはくれません。時間をおいて、勝手に深みが増してくれるとありがたいのですが…

ただ、「機が熟す」という側面はあると思います。歌には、その曲が世に出るべくして出るタイミングというものがあるように思います。同じ歌でも、世の中の空気になんとなくぴったり合うかどうかで売れ行きは変わってきます。でも、そのタイミングを見極めるのは至難の業。いろいろな理由で出そびれた楽曲なら、まだ「その時」ではないと考え、寝かせて静かに時を待てばいいのです。

それが最良の時を引き寄せるためのコツかもしれません。

ぶつかってこそ、のレコーディング

では、実際にどんなふうに曲ができあがっていくのか。ここでちょっと制作風景をお見せしましょう。

新曲の制作は、ディレクターやスタッフを交えてのミーティングから始まります。

話し合うのは、歌の方向性。いまどんな歌が求められているのか、元気が出る応援歌がよいのか。思わず涙が溢れるような哀歌（エレジー）がよいのかなどとみんなで意見を出し合います。

私もそのときの気分で「いまは平和な気分だからほのぼのとした歌がいいな」とか、「ちょっとしっとりしたいから女らしい歌がいいかも」などと、いくつかリクエストします。そうして、まずどの先生に作詞をお願いするかを決めます。詞ができあがったら、今度はどの先生に作曲をお願いするかを相談します。

「〇〇先生ならきっとドラマチックな歌になりそう」

「この詞の世界なら△△先生だね」

などと話し合って、最終的にひとりの先生に作曲の依頼をします。

そして待つこと数日から数週間。待ちに待ったデモテープが届きます。淡い恋心を抱き始めた文通相手と初めて逢うような気分です。

前述したように詞をいただいた段階で、私の頭の中にはすでにひとつのイメージができ

あがっていますが、曲がつくと、そのイメージはより鮮明なものになります。だから、ジャケット撮影のときの衣裳の色や柄をイメージするのもこのタイミング。

詞に曲がついたら、最後の味つけ。編曲家の先生にアレンジをお願いします。

編曲は楽曲をつくるうえでとても重要な役割です。曲にイントロや間奏をつけ、使用する楽器を決めたり、コード（和音）を考えたりと、編曲次第で曲のイメージはガラリと変わってしまうからです。

アレンジが完了した〝文通相手〟と次に逢うのはオケ録りの日。文字通り、カラオケを録音する日です。

スタジオには、それぞれの音を鳴らしチューニング中の数十人ものミュージシャンたち。彼らは、初めて見る譜面の中にどんな人物がひそんでいるのかを瞬時に想い描き、名々の楽器の「音」で表現してくれます。まさにこれぞプロのお仕事。私は、この集中力の塊のような方々が集まるオケ録りの日が大好きです。

アレンジャーがタクトを振りおろすと、いよいよご対面。イメージ通りの女性（ひと）が現れるかどうか、本当にワクワクする瞬間です。

オケ録りのあと、数日置いてからレコーディングに臨みます。

歌を録っていく前に必ずすることは、作詞、作曲の先生方と楽曲のイメージやメッセージをシンクロさせること。

これまで、それぞれが勝手に自分の中で歌のイメージをふくらませています。そのイメージをすり合わせてみると、意外にもまったく違うものだったということがあります。私はショートカットの女性を想像していたけれど、作詞の先生は、長い髪を一つに束ねた女性をイメージしていたりします。

だからといって、歌詞に髪の長さの描写などがあるわけではありません。長かろうが、短かろうが、歌自体に変わりはないですし、絵に描いて確認しあうわけでもありません。あくまでも「何となくこんな感じ」という感覚をすり合わせていくのです。

私が数回、ショートカットの生真面目そうな女性を演じて歌ってみます。すると先生から、

「うーん。もう少しやわらかい女性かな……」

次に私が、四五歳くらいの女性をイメージして歌ってみます。すると先生が、

「違う、ちがう。もっと若い女性だよ」

といった具合です。こうして、まず、先生方とイメージを共有してから本格的に歌を録

っていくのです。

昔の先生方は、いい意味で皆さんとても頑固でした。自分の思い描いた世界に誇りを持っているからです。かく言う、私も期待に違わず頑固です。

だから話が一向にまとまらず、レコーディングが深夜にまで及んでしまうということもしばしば。いいものをつくりたいという思いが強ければ強いほど、みんなこだわって一歩も引きません。

でも、それはとても大切なこと。ぶつかることを怖がっていては、いいものはできません。

とことん話し合い、議論しながら少しずつお互いに歩み寄り、最後にはみんなが納得のいくイメージを創造していく。

レコーディングの醍醐味は、まさにここにあります。

デビューのときから作詞家・吉岡治先生と作曲家・市川昭介先生という両巨匠に、この会議のような楽曲づくりを叩き込まれた私。そんな私が最近思うのは、昔にくらべて、いろいろと注文をつけてくださる先生が少なくなったということです。

みなさんとても優しくて「歌いにくいところがあったらどうぞ言って下さい。言葉を書

き換えますから」と、はじめから言ってくださる先生もいらっしゃいます。先生方とバトルする気満々でいる私としては物足りなくて、ちょっと寂しい気もします。だからというわけではありませんが、私はレコーディングにはこだわりをもっています。

レコーディングは私にとって、最も楽しく、最も大事にしたい時間。誰がなんと言おうと、納得いくまでスタジオにこもっています。

「オイ！　もっといいオンナを想像させろよ！」

両先生が生きていたら、きっと、こうおっしゃるだろうな、と思いながら。

準備せずして舞台には立たず

私は曲づくりと同じくらいステージづくりも大好きです。

どの歌を何曲目にするか。

この歌にはこんな衣装で、背景はシンプルがいい。

イントロの数秒で早替えをして、照明はうんと幻想的に。
そんなふうにいろいろと考え、大勢のスタッフが一丸となって一つのステージをつくりあげていきます。
けれど、綿密に計算したつもりでも、毎回いろいろなハプニングが起こるのがステージというもの。たとえばドレスのファスナーが壊れて着られなくなったり、つくはずのライトがつかなかったり。いまでこそ臨機応変に対応できるようになりましたが、まだ舞台経験の浅い新人の頃はステージのたびに胃袋がひっくり返るような思いでした。

一人で舞台に立つというのは、とても怖いものです。
ましてや人前が苦手な私は、ステージの三日ぐらい前から緊張で食事も喉を通りません。
歌詞を間違えてしまったらどうしよう。段取りを間違えないようにしないと……。
考えれば考えるほど心配になって、夜も眠れなくなってしまいます。
そんな怖さを克服するためには、一にも二にもお稽古しかありません。忘れたくても忘れられないほど、何度も何度もお稽古をして、頭に、身体に歌や進行を叩き込むのです。
それには、何も大きなお稽古場は要りません。頭の中だけでいいのです。

ステージが近づくと私はいつも、お風呂の中でイメージトレーニングをします。
なぜか小さな頃から閉所が好きで、一人で考えごとをしたいときなどは、押入れの中に閉じこもっていた私。外界から隔離されたような空間はとても安心で居心地がよく、集中したいときにはもってこいなのです。
大人になってからは、もっぱらお風呂場が私のお稽古場。
半身浴をしながら、幕が上がってから降りるまでの約二時間のショーを一人でリハーサルします。
歌詞はもちろんのこと、振り付けや動線、トークの内容に至るまでショーの流れをすべて頭の中で、早送りでおさらいするのです。途中で間違えたり、引っかかったりしたら、もう一度初めから。
一語一句、間違えずにできるまで何度も何度も繰り返します。
こうした毎日のイメージトレーニングで、様々なハプニングにも対応できる精神力を鍛えていくのです。

そうして迎える本番当日。

私はいつも二時間前に楽屋に入り、メイクを始めます。
ときにはメイクさんにお願いすることもありますが、ほとんどの場合、ヘアーメイクは自分でしています。特にこだわりがあるわけでも、腕に自信があるというわけでもありません。そうではなくて、一人で鏡に向き合う時間が私にとってはとても重要なのです。
メイクをしながら、頭の中では最後のシュミレーション。
（今日の会場は今回で三回目のはず）
（前に来たのは、たしか去年の五月だったかな）
（あの曲の後は、急いで着替えないと……）
ステージの進行を再確認しながら気持ちを集中させていきます。

鏡の中で私は徐々に〝変心〟していきます。
人前が苦手で引っ込み思案な性格から、何事にも動じない歌い手へ。自己暗示をかけて、もう一人の自分をつくっていきます。
あわただしいステージの前のメイク時間。
それは、外見だけでなく、心にも魔法をかける大事なひとときなのです。

きっかけは一枚の写真

ステージ衣裳である着物は、ショーの演出の要（かなめ）です。
どの曲にどんな着物を合わせようか、帯やかんざしはどうしようか。はたまた、どのタイミングで着替えるのか……。
衣裳によって曲の印象も変わってくるので、ショー全体の構成を考えながら選んでいきます。

秋口から年末にかけては、新しい着物を手に入れるチャンスの時期。呉服屋さんの大棚ざらえがあちこちの催事場で開かれます。
時期は重なっていることが多いので、見に行けるときは一度に何軒も回ります。グッタリ疲れますが、子供の頃から着物が大好きな私としては、いろいろな着物を見て歩くのはとても楽しいもの。ほしいと思ったときになかなかイメージに合うものが見つからないこ

とも多いので、いいものがあれば、このときとばかり買いだめをしておきます。

せっかちな私は、着物選びもかなりスピーディー。

まずは、折り重なっている着物の山からチラッと見えている柄だけで、ピンと来るものを選びながら会場を一周します。今度は、その選び出した着物を広げ、全体の柄を見てさらにほしいものを選り分けます。そして、最後まで残ったものだけを羽織って「保留」か「いらない」かに分けます。

「保留」組の写真を撮らせていただいて、ひとまず終了。選ぶのは早いのですが、すぐには買いません。即決してしまうと似たようなものばかりになってしまいがちだからです。なので、一度戻って手持ちのものと照らし合わせてから決めます。

そして最後は値段交渉。我が社で一番声のかわいい、おねだり上手なスタッフが呉服屋さんと電話で交渉します。何事も人任せが嫌いな私ですが、値段交渉だけはまるっきりスタッフ任せ。江戸っ子は値切るのが苦手なのです。

いままでに買った着物は、事務所の壁一面につくりつけた棚に収納されています。そのすべてを写真に撮り、「着物ファイル」を作成して管理。季節や色で分類して、「いつ」

「どこ」で着用したのかを記録しています。着物はファイルを見て選ぶのですが、このファイルがあると、とても便利です。同じ場所や番組で、うっかり同じ着物を選んでしまった、ということがなくなるからです。

私がこの「着物ファイル」をつけるようになったのは、ある一枚の写真がきっかけでした。デビュー当時の私は数着の着物をやりくりしてステージに立っていました。

少ないお給料の中で、最初にあつらえたのは、夏以外は年中着られる袷（あわせ）の着物。次に盛夏用の紹（ろ）の着物。そして、最後にようやく単衣（ひとえ）の着物をつくりました。

単衣は、季節の変わり目に着る着物で「春単衣」は六月、「秋単衣」は九月にしか着る機会がありません。どちらの時期にもなるべく着られるよう、無難な柄を選んで一着仕立てました。

そして、『忍ぶ雨』を発売した一九九〇年六月のキャンペーンでのこと。

当時のキャンペーンは、レコード屋さんの店頭で歌い、ＣＤを買ってくださったお客様には、色紙にサインをし、記念撮影をするというのが主流でした。

その日も、買ってくださったお客様と記念撮影をしていました。すると、そこへ一人の

お客様がやって来て、

「一年ぶりだねぇ。ホラ、去年も一緒に撮ったんだよ」

と、一枚の写真を見せてくれたのです。そこに写っていたのは、その日と同じ着物を着て、微笑んでいる私……。

そのお店は、毎回新曲を出すたびにお世話になっているレコード屋さんなのですが、その前の年もやはり六月に訪れていたのです。

お客様はとくに何も言いませんでした。着物のことなど、気にもとめていないようでした。でも、その写真を見た私は大ショックです。

せっかく二度も足を運んで下さった方と、去年と同じ着物で記念撮影してしまった。「単衣は一着しか持っていないから」という理由で、当然のように同じ着物で来てしまったことをとても恥ずかしく思いました。

この日以降、同じ失敗は二度とすまいと心に決め「着物ファイル」をつけ続けているのです。

第四章 いつも元気」の方法

働き盛りを襲ったC型肝炎

健康には自信がある私ですが、過去に一度、大病を患ったことがあります。二〇一〇年、私はC型肝炎の闘病中であることを公表しました。

病気が判明したのは、一九九四年です。

その年は二月に、新宿コマ劇場での初座長公演を控えていました。一カ月の劇場公演は激務なので、体に不調はないか、公演の前に簡単な健康診断を受けることにしたのです。

そのときに「軽い肝機能障害です。再検査してください」と言われ、精密検査を受けたところ、C型肝炎のキャリアだということがわかりました。病気の告知を受け、まっさきに向かったのは本屋さん。初めて聞く病名だったので、医学書を買い込んで、病気についていろいろ調べました。

C型肝炎とはC型肝炎ウィルスによって引き起こされる肝臓の病気です。ウィルスは、

輸血や注射針などを通じ、血液によって感染します。自覚症状がほとんどなく、慢性化しやすいのが特徴。気がつかないまま放置すると二〇年～三〇年で肝がんへと進んでしまうという、恐ろしい病気です。

本に書かれていた「倦怠感」や「足がむくむ」などの代表的な症状は、まさに我が身に当てはまることばかりでした。

当時は寝てもなかなか疲れが取れず、朝起きるのがひと苦労でした。

「一、二の三！」と号令をかけて、ようやくベッドから起き上がるありさま。それも、忙しさのせいだとばかり思っていました。

働き盛りの三〇代に降って湧いたような病気の話。

しかも、身に覚えのない病です。健康そのもので輸血など一度もしたことがなく、感染経路として考えられるのは予防接種ぐらい。私の何学年か下から、予防接種の注射針が一人一本という時代に入るのですが、それまでの注射器は使い回しをしていたため、患者数も多いと聞いています。

当時、C型肝炎の治療といえば、インターフェロン療法しかありませんでした。ウィル

スの増殖を抑える働きを持つインターフェロンという薬を注射するのですが、副作用が強いうえ、効き目が出ないことも……。

さらに、ウィルスが暴れているときにしか、治療が行えないという難点もありました。肝炎はウィルスが活動を始めることで発症するのですが、せっかくウィルスがおとなしく眠っているときにこの注射を打ってしまうと、寝た子を起こすようなことになり、かえって病気が悪くなる可能性があるというのです。しかも、私のウィルスの型は、インターフェロンの効きにくい難治性のものでした。

幸い、まだウィルスが暴れていなかったので、経過観察で過ごすということになりました。

何も手立てがないというのはとても不安で、心配になった私は、日常生活や食生活で、どんなことに気をつけたらいいかと主治医に尋ねました。すると、その答えは、

「ウィルスは宿主の体調に関係なく、暴れたいときに暴れ出します」

というもの。それなら、神経質になったところでストレスを溜めるだけです。月に一度の通院以外は、病気のことを気にするのを一切やめました。

そうして打つ手がないまま、長い年月が経ちました。

苦しい治療と仕事の狭間で

病気の判明から一五年経った二〇〇九年。ウィルスはまだ眠ったままでしたが、私は治療に踏み切りました。

改良型のインターフェロンが開発され、治癒率が格段に上がったと聞いたからです。以前のインターフェロンは、寝た子を起こしてしまうだけでなく、副作用の辛さに耐えられずに治療を中断した場合、再開することは不可能でした。

ところが、改良型のインターフェロンなら何度でも試せて、週に一回の注射で済むとのこと。副作用も少なく、仕事をしながら続けられるとあって、主人とも相談した結果、治療することに決めたのです。

副作用はある程度覚悟していたのですが、いざ治療を開始してみると、その影響は予想以上に辛いものでした……。

インターフェロンの副作用として、まず挙げられるのが「発熱」です。

最初のうちは、注射をした当日に三九度くらいの高熱が出ます。それから日を追うごとにだんだんと下がって、やっと三七度ぐらいになったと思ったら、また注射の日がやってきます。

回数を重ねるごとに体が薬に慣れてくるのか、熱は上がりにくくなりますが、それでも三七度は必ず出ます。そして、その微熱状態がずっと続くのです。

髪の毛もやせ細り、シャンプーのたびにバサバサと抜け落ちていきました。

そのうえ、血小板や白血球の数も低下し、体力は元の六～七割程度になります。併用する薬が赤血球も減らしてしまうため、貧血の症状には一番悩まされました。

とにかく「今日は元気だな」と思う日が一日もありませんでした。いつも体がだるくてだるくてしかたなく、毎日午後八時頃には体力が尽きてしまいます。

夕飯を食べて、あと片づけを済ませて床にごろんと横になったら、そのまま起き上がれずに寝てしまうほど。ふっと気がつくと、主人が足をもんでくれていたり、パタパタとあおいでくれていたり。主人は、私の寝顔を見ながら「このまま死んでしまうのではないか」と本気で思ったそうです。

治すための治療なのに、こんなに辛い思いをするなんて……。

でも、そこでやめるわけには行きません。主人の支えもあって、息も絶え絶えでしたが、仕事をしながらなんとか治療を続けることができました。

病と向き合うにはまず「知る」こと

治療を開始してから一年半。おかげさまで、ついにC型肝炎を克服し、苦しい副作用の日々から脱することができました。

C型肝炎が快復に向かっているかは、血液中のウィルスの数で判断します。ウィルスが「検出せず」という結果が出てからも、しばらくは治療を続けて様子を見ます。

私の場合は「検出せず」という結果が出るのが少し遅かったため、一年を予定していた治療が半年も延長されてしまいました。結局、七二週の治療でようやく完治することができました。

私は二〇一二年から厚生労働省の「肝炎対策特別大使」を務めています。大使の役目は、肝炎に対する正しい知識を伝え、検査を広く呼びかけることです。

いま、C型肝炎の治療薬は、劇的に進歩しています。一五年程前までは、治療しても治る確率は二〇％ほどでしたが、その五年後には五〇％になり、いまではほとんどの方が治ります。

私のように辛いインターフェロンを打つ必要がなく、飲み薬だけで治る時代になりました。あの苦しみを味わわずに治療ができるなんて、本当にいい時代になったと思います。

私が経験から思ったことは、病気になったらまずは知識を得ることです。

どんな治療法があるのか、どんな病院があるのかなど、最新の情報を調べることが大切です。知れば、むやみに病気を恐れることはなくなります。

そして、知識を得たら治療法もお医者さんも自分で選ぶこと。

「この注射を打ちましょう」「あの薬を飲みなさい」とお医者さんの言いなりで、病気が悪化してから「知らなかった」と文句を言っても遅いのです。自分の体のことなのだから、

他人任せにせず、主体的に選択すべきです。

知るべきことを知り、打つべき手を打ち、やるべきことをやる。

それが余計な不安を抱え込まずに、病と向き合う方法だと思います。

更年期障害は人生の終盤戦の予行練習

四五歳の頃、急に眠れない日々が続くようになりました。それは、これまでに経験したことのない、異常な不眠です。

「なんだかぐっすり眠れない」というようなレベルではありません。目はぱっちり冴え、頭も、すっきりと覚醒していて、眠れる気がまったくしないのです。

そんな日が三日ぐらい続きましたが、なぜかとても元気です。むしろ興奮状態でイライラするし、怒りっぽい。「これはもしや……」と産婦人科を訪ねてみると思ったとおり更年期障害でした。血中の女性ホルモン量を測ってみると、なんと六〇歳代との診断。さっ

そくお薬を処方してもらいました。

お薬の効果はテキメンで、不快な症状はかなり治まったものの、睡眠時間は以前にくらべてずいぶん少なくなりました。

以前は、七時間はぐっすり眠っていたのに、最近は四時間も寝ると目覚めてしまいます。早寝早起きはいいことですが、あまり早く休んでも夜中に目覚めては困ります。そんなときに「もう少し寝よう」と思ってもなかなか寝付けません。眠らなきゃと思えば思うほど、余計に目は冴えてきてしまいます。

そこで私は、眠らないことにしました。

一日、二日、寝なくたって死にはしない。眠らなくても元気なんだからいいや。

そう思うようにして目が覚めてしまったときや眠れない夜は思い切って、ベッドから出ることにしたのです。

そうして真夜中にごそごそと活動開始です。台所に立って新しいレシピに挑戦したり、撮りっぱなしにしていた写真を整理したり。思いがけずできた時間で、ふだん忙しくてできないことをするようにしました。

更年期症状のおかげで、思いがけずできた一人の時間。

結構、楽しいものです。

女性ならば、誰もが通る更年期。辛い症状が出るのは、二割から三割の人だとか。

この時期ばかりは自分をコントロールしようとしても思いどおりにいかず、かえってストレスを抱え込むだけです。それならば、いうことを聞かない心や体に柔軟に対応して、前向きに付き合っていくしかありません。

これからさらに歳を重ねていけば、「あそこが痛い」「ここが痛い」と体のあちこちにガタがくることでしょう。そのときに、きっといま学んでいる「体との上手な付き合い方」が生きてくるはず。

更年期障害とは、人生の終盤戦の予行練習なのかもしれないと思う今日この頃です。

ストレスの原因は思い込み？

「ストレスは万病のもと」とよく言います。

昔から、私はストレスとは無縁な人間だと思っていました。

でも、よく考えてみたらストレスがなければ円形脱毛症になるはずもなく、おまけに重度の肩コリは、マッサージさんの指も悲鳴を上げるほど。

いまさらですが、私も人並みにストレスを感じていたのだ、と思い直しています。

昔は、よく眠れなかった日の翌日は仕事へ向かう足取りが重く、気分も憂鬱でした。睡眠が足りないと、声が出にくいと思っていたからです。

ところが、よく眠れているのに調子が悪いときもあります。たとえば花粉が飛び交う季節だったり、風邪を引いてしまったり。毎日歌っていれば調子がいいときも悪いときもあります。

もちろん体調を万全に整えて、仕事に臨むことはプロの義務ですが、調子の悪いときにどう対処するかもまたプロの腕の見せどころ。

かすれて伸びの悪い声を、どうマイクにのせるか。

あるいは、喉のどの部分を使って声を響かせるか。

経験とともに、マイナスをカバーするテクニックが身についてきたとき、「眠らなければ……」というプレッシャーから解放されたのです。

ストレスというのは結局のところ「〜しなければいけない」という呪縛から生まれているように思います。

外からかかるストレスもありますが、自分で勝手に思い込んだストレスなら、見方を少し変えるだけで、消えてくれるものもありそうです。

運動嫌いの私がたどり着いた健康法

ストレス解消法といえば、「運動」と答えることが、当たり前の風潮ですが、運動嫌いの私にとって「運動しなければいけない」と思うことがそれこそストレスです。

そんな私が、ある健康番組に出演したことをきっかけに突然ウォーキングを始めました。

仕事がある日も朝早く起きて、テクテク、テクテク。決まった時間に決まったコースで、一時間で約八〇〇〇歩を歩いていました。

歩き始めて数日たったころ、雨が降りました。

やると決めたら一日も欠かしたくない私は、ガッカリです。雨の日以外にも仕事で早朝から出発しなければならなかったり、旅が続いたり、花粉が飛んだりと、どうしても歩けない日が出てきます。そんな日が続いて、できないことがかえってイライラにつながるようになりました。

そのうち、体調が悪くて休んだ日でさえ、何となくサボったような気になり自責の念が湧いてくるようになりました。

体調維持のために歩いているはずが、逆にストレスの素になってしまったのです。

以来、ウォーキングを日課にすることはやめ、いまは思い出したころに楽しく歩いています。この「思い出したころに」というのが長く続けられる秘訣のような気がします。

その他に私がずっと続けている健康法は、いたってシンプル。

ラジオ体操と寝る前のストレッチです。

ラジオ体操は第一と第二をセット。意外に覚えていないもので、号令入りの音楽が必要です。ストレッチはお風呂あがりにテレビを見ながら二〇分ほど。

自分で動くのはこれぐらいで、あとは他力本願です。

異常なまでの肩こり持ちの私は、毎日のマッサージが欠かせません。時々マッサージさんに来てもらったりマッサージチェアやマッサージ機でこりをほぐしたりしています。

健康のためには、ストレスを溜めないことが一番。

健康維持のための運動がストレスになってしまっては本末転倒です。健康法にはいろんな流行りすたりがありますが、自分に合った方法で無理せずに続けることが大切だと思っています。

私の心安らぐひととき

結婚して初めて日常的に料理をするようになった私。最初のうちはずいぶん苦労しましたが、それもいまではプライベートの楽しみの一つです。

主人は食べることが好きな人。と言っても、何も豪勢な料理を望むわけではありません。新鮮な食材と心のこもったものであれば、お茶漬けでもいいという人です。仕事柄、三ツ星レストランで会食することも多いため、ネクタイを外し、くつろげる家での食事が大好きなのです。

そんな主人になんとか美味しい手料理を食べさせてあげたいと、仕事の合間をぬって慣れない料理にいそしんできました。

本屋さんに行って、片っ端からレシピ本を購入。主人が留守にする日は、チャンスとばかりにキッチンにこもって夜な夜な料理の試作です。

たとえば主人の好きな「鯵の南蛮漬け」。

「黄金の配合」「最強のレシピ」などと謳いつつ、レシピによって調味料の配合が全然違います。お酢とお醤油の分量が一対一のものもあれば、二対一だったり、お酢の代わりに白ワインビネガーを使っていたり。一体、どれが美味しいのかわかりません。そこで、そのすべてを作ってみることにしました。

バットを三つ用意して、レシピ通りに、調味料を正確に量って、三通りのつけだれを作ります。一緒に漬ける野菜もこっちにはタマネギ、こっちはセロリと人参……といった具合に少し変えてみます。

そこに揚げたての鯵をジューっと漬け、時間をきっちり計ります。

そして最後は試食して、「これは、美味しい」「こっちは甘すぎ」などの感想を記録。

キッチンは、さながら夜の実験室と化していました。

そうして食べてみておいしいと思ったものが晴れて食卓に並び、さらに主人の舌によってふるいにかけられます。主人から「おいしい」と褒められたものだけが、最終的に我が家のレシピになるのです。

ただ、レシピを再現しても必ずしも同じ味になるとはかぎらないところが、料理の奥深いところ。同じようにつくったはずなのに、「この前と味が違う」と言われることもしばしば。食べてみるとたしかにそんな気がします。

なぜだろうと思ったのですが、よくよく考えてみれば、夏と冬では沸騰時間が違い、したがって、お湯の蒸発量も変わるわけです。だから同じ一カップの水を入れても、味が濃くなったり、薄くなったりする。同じ野菜でも、走りなのか、旬なのかで水分量や甘みが違います。おまけに、食べる人のその日の体調によって、同じ味でも感じ方が変わるのです。

そうした違いがわかってからは、レシピに頼りきるのはやめました。

いまでは新婚当初ほどの実験はしていませんが、それでも新しいお料理に挑戦するときは、食卓に出す前に一度つくってみて、スタッフと一緒に味見をしています。

我が家では一品一品はさほど豪勢ではありませんが、なるべく品数を多く出すようにしています。そこで、新メニューを出すときは、大好物のテッパンメニューと一緒にさりげなくしのばせます。

「この料理、どうしたの。おいしいね」

という一言が出たら、めでたく我が家の献立入り。こうして我が家の味は、少しずつ増えていっています。

収穫期のよろこび

主人は、自分が育てたものを自分で収穫するのが大好きです。

「ブルーベリーができている頃だ」とか、「そろそろジャガイモを掘らなくちゃ」とか、いつもそんなことばかり言っています。

自分の畑でできたものを、自分の手で収穫して、みんなに送りたくてたまらない。自分では食べなくてもいいから、親しい人、お世話になった人たちにお裾分けしたいという人なのです。

とはいえ、さしあげる量にも限界があります。実りの時期ともなると、我が家はいろいろな収穫物で溢れかえってしまいます。

シイタケが旬の時期には、連日シイタケを食べ続けます。ソテーにしたり、鍋に入れたり。それでもまだ使いきれない分は、干したり、塩漬けにしたりして貯蔵。あとは冷凍に、オイル漬けに……。とにかく、ありとあらゆる方法で保存します。おかげで食材のストック方法にはずいぶん詳しくなりました。

こうして旬の食材を消化しようと奮闘していると、毎年何かしらのマイブームがやってきます。

一番夢中になったのは、ジャム作り。

ぶどうに、キウイにブルーベリー。プルーンやちょっと珍しい栗のジャム。いろいろな種類をつくりました。ビンを煮沸してはできあがったジャムをせっせと詰めて、オリジナ

自分の畑で収穫したものは、みんなに送りたくてたまらない

ルのラベルを貼れば完成です。

ジャムだけではなく、コンポートもよくつくりました。それから、ジャムを使ったデザートも。そんなふうに派生して、レパートリーがどんどん広がっていっています。

大量の段ボールを前に「こんなにたくさん、どうするのよ～」なんて悲鳴をあげながらも、すでに頭の中では「どうやって料理しようかな」と思案中。毎年、収穫の時期になると、ゴソゴソと冷蔵庫のお掃除を始める私です。

一年のしめくくり

お正月の楽しみの一つといえば、主人がつくるザラメで煮込んだ、ほどよい甘さのぜんざい。ほかにも、暖炉に薪をくべたり、焼き芋を焼くのも主人の役目です。

一方、私はというとこの正月休み中に片付けてしまわなければならないことがあります。

それは、前年の手帳やアルバム、各種ファイルの整理です。

カメラが趣味の私は、一年に撮る写真も膨大です。それらのデータは、全てＤＶＤに焼き、インデックスをつけて保存しています。

もちろん、お気に入りの写真はｉＰａｄやスマホでも持ち歩いていますが、なぜか昔ながらの写真整理術はやめられません。時系列に並べたものから、ダイジェスト版。コミュニティ別やイベント別など、私のアルバムは数種類あります。

そのアルバムに一枚一枚思い出を貼っていくのです。

アルバム整理が済むと、今度はレシピのファイルの整理です。

こちらも、種類がたくさんあります。「和食」「洋食」「中華」に「イタリアン」。「揚げ物」や「蒸し物」と言った調理法で分けたものや、「肉」「魚」「野菜」と、食材で分けたもの。そして「今度つくってみよう」ファイルまであります。

こうしておくと、献立に困ったときや急ないただきものがあったとき、すぐに下処理の方法や保存法がわかりとても便利。ファイルだけ見ると、ものすごくレパートリーが多いように思われてしまうのが、玉に瑕なのですが……。

そして、最後は手帳の整理。

「黒革の夏子帖」と呼んでいる私のシステム手帳には、三〇年欠かさずつけてきたスケジュールの他に、簡単な日記も綴られています。

スケジュールは「コンサート」や「番組」など、仕事内容によって細かく分けて記入され、一目瞭然の過去歴にもなっているのです。

手帳を見返しながら、過ぎ去った一年をしばし反芻。そして、レフィルを入れ替えて心機一転。

こうして心新たに、新しい年をスタートさせるのです。

第五章 誰かのためにできること

遠くの誰かのために行動すること

誰かのために何かをするということ。それは実際にやってみると、言葉にするよりもずっと難しいことです。

本当に相手のためになっているのか。

自己満足になっていないか。

常に自問自答と隣り合わせ。身近な人に対してでさえそう思うのだから、遠い存在であればあるほどなおさらです。

新潟県中越地震や東日本大震災の支援をはじめ、私たち夫婦はいろいろな福祉活動を継続的に行ってきました。

私が積極的に福祉活動をするようになったのは、主人の影響です。結婚するまでは、チャリティー公演などに参加することはあっても、個人的に何かアクションを起こすことはありませんでした。

私一人に何ができるんだろうと思っていたから、というのが理由です。

何かしてあげるということに、ある種のおこがましさも感じていました。おまけにやったらやったで、売名行為だなんだと言われます。だから、あまりふれないようにしてきたのです。

結婚して、主人が福祉活動に並外れて熱心な人なのだということを知りました。一五歳から老人ホームや刑務所を慰問しているとか、ベトナムに里子が何人もいるとか、結婚するまで一切知らなかったのです。

結婚して初めて連れて行ってもらった海外は、主人の仕事を兼ねたベトナムとシンガポール旅行でした。きっとこれまで自分がやってきた足跡を私に見せたかったのでしょう。旅行では、ずっと支援してきた孤児院や盲学校などを訪れました。

ベトナムでは、六人の子供たちからいきなり「お母さん」と呼ばれて驚きました。主人の養子たちでした。でも、彼ら彼女らにしてみれば、見知らぬ国の見知らぬ大人に「お母さん」と言うことになんら抵抗はないのです。目の前には、私がこれまで知らなかった世界が広がっていました。

誰しも、子どもたちの悲惨な暮らしを実際に目にすれば、「何かしてあげたい」と思うもの。私も涙ながらにそう思いました。

けれど、日本に帰ってきたら、自分たちの生活に追われて記憶が薄れてしまうのもまた事実。そのうえ、もし身内が病気だったりすれば、今日、明日栄養失調で死ぬかもしれないという遠くの命のことは、かすんでいってしまいます。

でも、それが普通だと思います。主人のように「何かしてあげたい」という思いをすべて行動につなげてきた人はめったにいないでしょう。

主人はいつも言います。

「『ありがとう』の言葉すら求めてはいけないのが、福祉なんだよ」

見返りがほしくてやっているわけではない。やりたければやるだけのことであって、やらなくても別にいいことなのだから、と。

その言葉を聞いて、私は吹っ切れました。

何もやらずにうじうじしているよりは、行きたいと思ったところに行って、やりたいと思ったことをやったほうがいい。

ベトナムでのチャリティコンサート

何かやって、まわりにどう言われようがかまわない。
どんどん「おばちゃん化」しているせいもあるのか、そう割り切れるようになりました。

ただ、被災地などから帰ってくるときはいつもうじうじしています。
私たちがいくらがんばって支援物資を持っていったところで、限度があります。家族や家を失い、途方にくれている人に向かって、「がんばってください」なんて口が裂けても言えません。行くたびに感じるのは、「結局は何もできない」という無力感です。
でも、やらないでうじうじしているよりは、やってうじうじしたほうがいい。
一人よがりの支援にならないためには、「うじうじ」もまた、福祉活動を続けていくうえで必要なことではないかと思っています。

一人ではできないことも、集まればできる

東日本大震災が起きたときは、もう当然のことのように主人と支援に行くと決めていました。あとはお互いのスケジュール次第でした。
実際に行ったのは、四月一日から三日間。すぐに行かなかったのは、やみくもに行っても迷惑になるだけだと判断したからです。
私たちが行けば、当然ものも食べるし、用も足します。断水しているところに行って、被災地の貴重な資源を使うわけにはいきません。
自分たちの食料や暖の取り方、移動のガソリン、トイレなど全部確保したうえで、何を届けられるかを考えなければいけない。そこで二週間ぐらいの準備期間を設けました。
テレビのニュースで見る被災地の方々は、口々に寒さを訴えています。
そこで、炊き出しでとにかく温まっていただこうと主人はカレー、私は豚汁をつくるこ

とにしました。

あらゆる方面にも協力を呼びかけました。すると皆さん快く賛同してくださり、各企業もさまざまな物資提供をしてくださったのです。

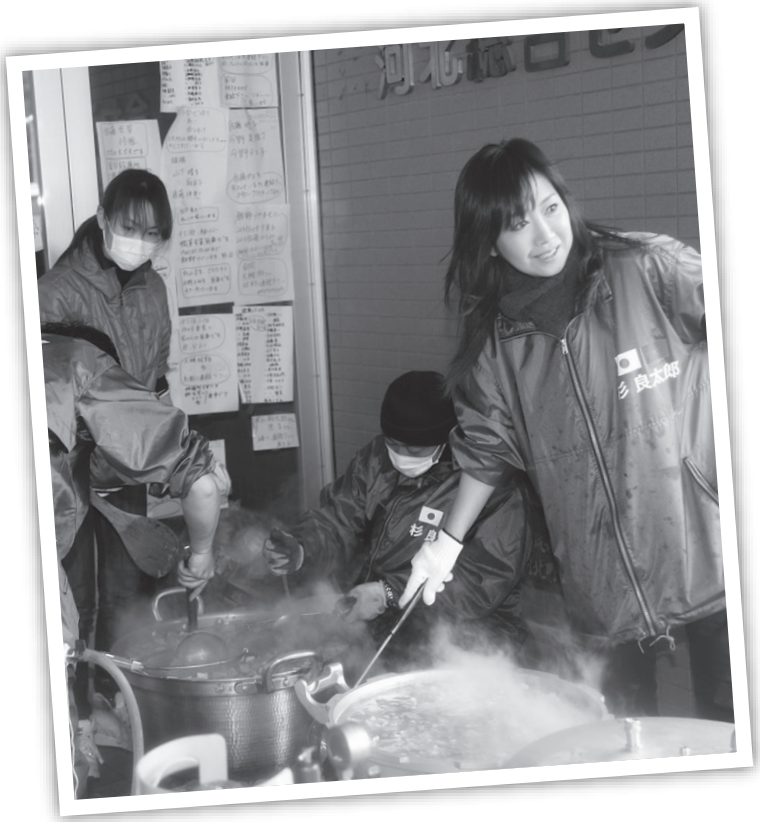
両事務所のスタッフはもちろん、後援会の皆さんや主人の劇団関係の若い役者さん、歌手仲間、行きつけのお寿司屋さんまでが仕事の合間を縫って、仕込みのお手伝いに来てくれました。みなさんが「自分一人では、どうしたらよいのかわからないけど何かしたいと思っていた」と言って集まってくれたのです。

仕込みはとても大変でした。

主人の事務所を調理場に野菜を切り、こんにゃくを茹で、下ごしらえをして袋に詰めていきます。気が遠くなるほどの量の野菜を洗って、切っての繰り返し。仕込みだけで、かなりの時間がかかってしまいました。

豚汁の仕込みの隣では、カレーの煮込みが始まっていました。

合羽橋で買ってきた大きな寸胴で、いざかき回そうとしたとき、長いお玉が必要なことに気づく始末。家庭用の小さなお玉では、おそらく肘まで浸かってしまうでしょう。慌て



2011年4月、石巻市にて炊き出しのボランティア

てまた合羽橋へ行き、長いしゃもじのようなヘラを買ってきました。
ところがこのヘラが、重くてかき回すのにひと苦労。
まるで船を漕いでいるみたいです。主人は腱鞘炎になりながらも、一生懸命かき回してようやく完成したのです。

最終的なメニューは、カレーと豚汁のほか、野菜サラダに杏仁豆腐（あんにんどうふ）。
支援物資として持っていったのは、水二トン、男女下着類四〇〇〇枚、歯みがきセット一万セットのほか、入れ歯洗浄剤、除菌剤、ストーブ、灯油、ガソリン……などなど。トラックやタンクローリー、冷蔵車などを含め車両一二台で、津波の被害が大きかった宮城県石巻市を訪ねました。
それにしても、あのときの協力体制は見事だったと思います。
声をかけたら大勢の方が快く集まってくださり、それぞれが自分のできることをやる。「何かしたい」という思いがあって、なおかつ、きちんと音頭を取る人がいれば、あれだけ一致団結できるものなのだと改めて感心しました。

おばあちゃんたちの笑顔が教えてくれたもの

被災地を訪れて深く印象に残ったのが、みなさんの笑顔です。
津波で九死に一生を得たという高齢の女性が、泣きながら訴えるのではなく、淡々と笑顔で首まで海に浸かったというお話をしてくれました。それも一人ではなく、何人も。
あるおばあちゃんは、
「気がつくと家の天井が顔の前にあって、もうこれ以上波が来たら死んでしまうというところで、柱にしがみついて、天井に鼻をこすりつけて息をして助かったんだよ」
と話してくれました。またあるおばあちゃんは、
「お父さんと手をつないでいたんだけれど、『俺はもうだめだ、おまえは生きろー』と言って、ひゅーって流されちゃったんだよ」
と凄惨な体験を静かに語ってくれました。
お話を聞くたび、ショックで言葉がありませんでした。そして、彼女たちはなぜ、こう

も笑顔でいられるのか不思議でなりませんでした。

きっと、泣きつくしたあとなのでしょう。泣き疲れて、涙も枯れてしまったに違いありません。もう受け入れるしかないところにきたのだと思いました。私には想像もつかない心境です。

大切なものを失ったことを忘れることは決してないでしょう。思い出せば胸が締めつけられるほど苦しく悲しく、涙がこぼれてくることでしょう。

それでもなお、人は前を向いて歩いていこうとする。

どんなにつらいことがあっても、必ず人間は立ち上がって、乗り越えていける——。

おばあちゃんたちの笑顔に、人間の強さというものを教えられました。

最初に石巻市を訪ねて以来、その後も宮城県の他の都市や福島県、岩手県、茨城県など東日本大震災の被災地を訪問し続けています。

被災直後は、歌を聴くような心境でもないだろうと、ブーツやジーパンなどの動きやすい格好で作業のお手伝いをしに行っていました。ところが意外と多かったのが「着物で歌ってほしかった」という声です。華やかな歌の世界に聴き入って、ほんの一瞬でもいいから、つらい現実を忘れたいという思いを感じました。

震災から日が経つにつれて歌いに行くことが増え、いまでは主人や仲間たちとチャリティーコンサートなどで訪れています。

被災者のみなさんからよく言われるのは、「私たちの声を届けてほしい」ということ。それから、「忘れないでほしい」という声も何度も聞きました。

それで、ラジオやテレビなどに出たときには私が見聞きした被災者の声を届けるようにしています。

歌を楽しんでいただくのはもちろんですが、私達の役目はほかにもあると思っています。

それは、「風化させないこと」。アクションを起こすことで何らかの形でも話題にしてもらうこと。

そうして少しでも被災地のいまの状況や声を広く一般の人々や国に届けることが、おばあちゃんたちのこれからの笑顔につながることだと思っています。

父から学んだ「責任を持つ」ということ

真面目にやっていれば、いつか必ずいいことがある。そう思って、これまで辛抱強く生きてきました。

真面目に取り組もうと思えば思うほど、仕事に対して求めるレベルが高くなり、自分にも一緒に働く人間にも厳しくなります。私は独立して個人事務所を経営していますが、これまで何度となく若い人が入ってきては、音を上げて辞めていきました。

しかし、自分のやり方を変えようと思ったことはありません。そういう頑固一徹なところは、まさに父親譲りです。

父は、従業員がいい加減なことをしていると、いつも鬼のような顔をして厳しく叱っていました。

幼い私は母と一緒になって、「あんなに怖い顔をしなくたっていいのにね」などと言っ

魚屋「夏っちゃん」生粋の江戸っ子！

たものです。けれど、いま自分の立場で考えてみると、父の気持ちがよくわかります。店を守るためには厳しくならざるを得なかったのだ、と。

従業員の誰が問題を起こしてもそれは最高責任者の責任であり、ひいては店の存続に関わります。

たとえば、アルバイトの人が指をちょっと怪我して、「まあいいか」とそのままお刺身を扱ったとしましょう。そのお刺身を買って食べた人が食あたりにでもなったら、最終的な責任を負うのは店の看板を背負っている父です。アルバイトの人は「ごめんなさい」で済みますが、上の人間はそうはいきません。

それで営業停止にでもなったら、お客様の信頼を失うことになりかねません。ほかの従業員にも迷惑がかかります。だから、いつも父は衛生管理には、細心の注意を払っていました。

そうして雨の日も、雪の日も変わらず店に立つ。

働く父の背中を間近で見ながら、仕事に責任を持つこととはどういうことか、私は肌で学んできたのです。

事務所に面接に来る最近の若い人たちを見ると、仕事に対する責任感に欠けている人が多いような気がします。

やりたいことが見つからないまま、それでもとりあえず働かないといけないから、どこか手近に就職できるところを探す、という人がほとんど。将来のため正社員にはなりたいけれど、「責任が重たいのはイヤ」「それなりのお給料でいいので、休みは多くほしい」と、この仕事が好きで来る人はほとんどいません。

しかもそういう人にかぎって、長期の休みを取るときに進行中の仕事をそのまま放り出していきます。その人が不在のときに、取引先から「あの件、どうなりましたか？」と催促が来て、何も聞いていないスタッフは大慌てです。資料がみつからなくて、ちょっとしたトラブルになることだってあります。

「休むな」とは言いませんが、任務を完遂するまでは休むわけにはいかない、と思うのが当たり前。

やりたいことだろうが、やりたくないことだろうが、お金をもらって働いている以上、与えられた仕事は責任を持ってきちんとやる。

それが基本というものではないでしょうか。

責任を持って取り組めば、どんな仕事からでも働く喜びや誇りは得られます。反対に、無責任でいるかぎり、決して仕事の充実感を味わうことはできないのです。

立つ鳥、悔いを残さず

人付き合いに関して、私はあまりマメではありません。

筆不精で、電話も用がなければしません。留守電にメッセージを残すのも苦手です。

目上の人にはもちろん敬意を払いますが、必要以上に媚びを売ることができないのです。

だから、ほめるのもほめられるのも苦手。歯が浮くようなことは、言うのも、言われるのもダメです。ただ最近は、少しは口に出さないと相手に伝わらないかなと、ちょっとは反省していますが。

そんなぶっきらぼうな私ですが、一つだけ気をつけていることがあります。

それは、お世話になった人に、決して不義理はしないこと。

最初に所属した事務所に夜逃げされたのをはじめに、その後何度か事務所を変わりましたが、そのどこの会社にも後足で砂をかけるようなことはしてこなかったつもりです。

「立つ鳥跡を濁さず」どころか、多少なりとも恩返しをしてから、次の場所へ行くように努めてきました。相手にしてみれば、「まだ足りない」と思っていたかもしれません。

けれど、少なくとも私は「これでよし」と自分が納得するまでは、次のステップには進みませんでした。

なぜならば、後悔をしたくないからです。

誰にでも自分の心の中に、人生のシミや汚点はあるでしょう。できることなら戻って消したいと思うけれど、一生消すことはできません。しかも苦い思い出というのは、時々ふっとよみがえって、胸をチクッと刺すものです。そんな思いをこれから先、一つでも増やしたくないと思うからです。

事務所で働いている子たちにはいつも、無責任な人間にだけはならないようにと言って聞かせています。黙っていなくなる子が増えているからです。

仕事を辞めるのはかまいません。ここだけが働く場所ではないし、よそで勉強できることもたくさんあるでしょう。やりたい仕事が見つかったなら、それはとても喜ばしいこと。

でも、辞める最後の日まできちんと勤めあげて、きちんと引き継ぎもしてから立ち去ってほしい。「ピリオドを一回打つ」ということを、ここでしっかり覚えていってほしいのです。

しっかりとピリオドを打って、次のステージへ羽ばたいて行った子たちとは、いまだに交流が続いています。年賀状が来たり、上京したときは事務所に遊びに来たり、逆に私がその子が住んでいる地方に行ったときは一緒にご飯を食べたり。

でも、なかには逃げてしまう子がいます。何も言わずに急に来なくなったり、鍵を返さずに黙って消えたりする子が結構いるのです。もちろんですが、そういう子たちはその後、一切姿を現しません。

時々、その子たちはどうしているかなあと思います。私がテレビに出ているのを見るたびに、苦い思いをしていなければいいけれど。

逆にこちらが心配してしまいます。

短気な父と呑気な母

親バカならぬ、子バカかもしれませんが、私は日本一いい両親のもとに生まれたと思っています。

父は真面目でちょっと頑固。照れ屋で典型的な江戸っ子です。そんな父の隣でいつも笑っているマイペースな母。お互いを補い合いながら、二人三脚で家業の魚屋を切り盛りしてきました。

商売をしていると、休みは週に一度、定休日の日曜日だけ。

仕出し料理も作っていたので、年末は大晦日まで大忙しです。お正月は疲れ果てて寝正月。そして、またすぐに店を開け、日常に戻ります。

年中忙しくて家族旅行や誕生日会、クリスマスパーティーなどとは無縁の子ども時代。それでも唯一のお休みの日曜日には、デパートに連れて行ってもらうのが恒例でした。

日曜日の過ごし方には、判で押したようにいくつかのパターンがあって、一番多かったのは、父が趣味の釣りに早朝から出かけ、残された母と姉と私の三人でデパートに行くというコース。

三人で小田急線に乗って新宿駅で降り、向かうのはまっすぐ小田急デパート。ひとしきりぶらぶらして、いろいろお買い物をし、夕方父が帰ってくる前に戻るのが決まりでした。

ごくごくたまに父が釣りに行かない日は、家族揃って渋谷に向かうこともありました（方向音痴で新宿にしか行けない母と違い、父が加わると渋谷に行けるのです）。

渋谷に行けば、いつもとは違う西村のフルーツパーラーに連れて行ってもらえます。それがうれしくて、「明日はホットケーキだね」などと、前の晩から姉とウキウキしたものです。

そして翌朝。

姉妹二人はよそいきの服を着せてもらい、三つ折りのレースの靴下にエナメルの靴。エナメルの靴のストラップは父がパッチンととめてくれます。父もオーバーコートを着て、玄関のところで三人で手をつないでスタンバイＯＫ。

一方、母はというと、ギリギリまで掃除や後片付けをしているので、まだ支度ができて

私の自慢の両親。父・輝継　母・登喜子

いません。早く出かけたい父が、
「おーい、早くしろー」
と言っても、
「ちょっと待って、口紅が……」
とか言って、なかなか現れません。そのうち、しびれを切らした父が、
「もう行かない、今日はやめだ！」と叫びます。
父が部屋に戻って布団を敷いて寝始めたら、渋谷はお預けのパターン。取り残された私たち姉妹は「今日はホットケーキはなしだね」とヒソヒソ。そこへようやく支度を終えた母が現れて、
「あら、また寝ちゃったの。じゃあ、私たちでゆっくり行こうね」
と父を置いて、いつものように三人で新宿へ行くことになります。
父の短気はいつものことなので、母も慣れたもの。けれど、帰りには、
「パパが待っているから、バッテラでも買って早く帰ろうね」
と言って、父へのお土産を欠かしませんでした。
そして、帰宅した私たちを待っているのは、イライラが収まったいつものやさしい父。

母は何事もなかったかのようにお土産を広げます。そうして、和気あいあいと一家だんらんが始まるのでした。
短気な父に対して、生来の明るさで接する呑気な母。
人間だから、もちろん短所も長所もあります。でも、そうしたよいところも悪いところもひっくるめてお互いを尊重し合う父と母。
二人は、私にとって日本一の親であるとともに、理想の夫婦でもあるのです。

下積み時代の大きな支え

祖父の代から営んできた魚屋は、道路拡張の区画整理を機にたたみました。そのとき、父は五九歳、母は五八歳。
少し早い隠居ですが、若い頃からずっと遊ぶこともなく働きづめだった両親に、これでやっと楽をしてもらえると、ホッと一安心したものです。

それだけではありません。きっぷがいい父は、いつもお客さんにはサービス満点。それがもとで、いつかは店が潰れるのではと、内心冷や冷やしていたからです。

たとえば、私が小学生のとき。

家庭科の調理実習でカジキのソテーをつくることになりました。そこで先生から、材料費の入った封筒を渡され、カジキマグロの配達を頼まれました。

実習の当日に届いたのは、明らかに予算オーバーのステーキ用の最高級のカジキです。先生は大喜びでしたが、私は真っ青でした。

『戻り川』がヒットし始めた頃になるとファンのほかに、お店の取材をしたいと雑誌社やテレビ局の方も訪ねて来るようになりました。そのたびに、何かしらお土産を用意する父。

紅白出場が決定したときなどは、大盤振る舞いもよいところです。高価なイクラや数の子、かまぼこなどを詰め合わせる父を横目に、母はいつも通りニコニコ。私はハラハラしたものです。

そんな両親に、いつかは日当たりのいい家をプレゼントして、楽をさせたい。そのためには、なんとしてでも歌い手として成功しなければ——。

その一心でがむしゃらにやってきました。その思いが、鳴かず飛ばずの下積み時代の大きな支えになっていたことは、言うまでもありません。

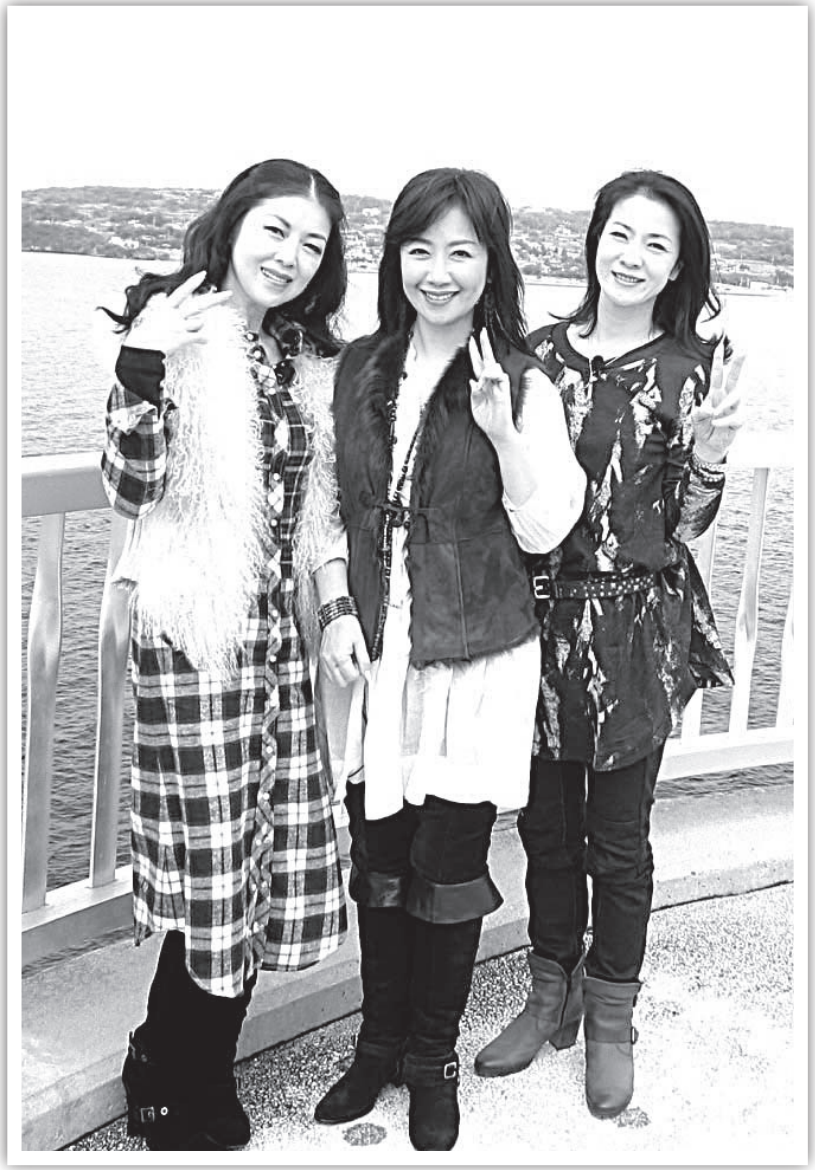
念願叶って両親はいま、私が建てた家に一匹の犬と一緒に暮らしています。ただ残念なのは、日当たりがあまりよくないところ。

私が生まれ育った家は日当たりがあまりよくない場所でした。だから、新しく家を建てるときは、さんさんと日が入る場所に、庭と縁側のある家でのんびり暮らしてもらおうと思っていたのですが、いざ土地を探す段になると、二人とも隣近所やこの土地と離れる気はないと言うのです。そこで、同じ場所に家を建て替えることにしました。ところが、あとになって隣近所はみんな家を売っていなくなってしまい、おまけに空いた土地にはどんどんビルが建ち……。

理想通りとはいきませんでしたが、二人が満足しているならそれでよし。末永く仲良く暮らしてほしいと願っています。

「演歌三人娘」の絆

演歌の歌手仲間はみんな仲良しです。時々食事に行ったり旅行をしたり……。
そんななかでもとくに親しいのは坂本冬美さんと藤あや子さんのお二人。
ライバルが親しいなんてありえないという方もいらっしゃるでしょう。
確かに私たちはライバルです。でもそれは、単なる敵対関係にあるということではなく、お互いがお互いを認め、高め合う関係だという意味です。
三人ともほぼ同時期にデビューし、当時たくさんあった音楽祭では各賞を競い合った仲。まわりからみれば、敵対関係に見えたかもしれません。けれど、実際あの頃の私たちは自分と戦うのに必死で、誰かと戦う余裕なんてまったくありませんでした。
大きなプレッシャーのなか、みんな似たような葛藤を抱えていました。
どうすれば、のびのびと自分らしいパフォーマンスができるか。
大舞台でアガるのを防ぐにはどうしたらよいか。



坂本冬美さん、藤あや子さんはよきライバルでもあり、私の大切な親友です

喉の調子が悪いときにはどうやって乗り切るか。
時々誰かの家に集まり、飲んでへべれけになりながら語りあったものです。そして、折にふれ、仕事やプライベートのことまで、ありとあらゆることを打ち明け励まし合ってきた仲なのです。

余談ですが、私は二人の盲腸の手術に立ち会っています。
あるとき、一年ごとに二人が盲腸になりました。最初の年は冬美ちゃん、翌年はあやちゃんです。あんなに忙しかった時期に何とか駆けつけられるスケジュールになっていたのも不思議なのですが、とにかく連絡を受け病院へ急ぎました。
盲腸ぐらいで、ご家族に心配かけるわけにも行かず、術後の説明は私が受けました。
切り取った臓器をみながら……。
「来年は夏っちゃんね」二人にそう言われましたが、あれから十数年、私の盲腸はまだ痛む気配もありません。

いまでも何かあったときは、必ずお互いに連絡します。若い頃にくらべると、集まる機会は減りましたが、それでも会えば話は尽きません。
売れるか、売れないかという時代に一緒に戦ってきた戦友たち。
彼女たちは、昔もいまもそしてこれからも、私にとって家族同然の存在なのです。

頼もしい「夏子組」に感謝

「夏子組」は、私のファンクラブの名前です。毎年その「夏子組」のみなさんと行く旅行会があります。
ある年に福井へ行きました。越前岬にある私の「雪中花」の歌碑を訪ねて、越前カニを食べに行こうという企画。
楽しい旅行も終わって、これから「さぁ、帰りましょう」というとき、ものすごい暴風雨に襲われました。
解散駅に着いたものの、電車のダイヤは大幅に乱れて予定していた列車が来る気配はあ

りません。三時間遅れで到着した電車も、ぎゅうぎゅうの満員。

そんな状況にも関わらず、解散したあとは関係ないと言わんばかりに、旅行会社の添乗員は自分だけさっさと帰ろうとしています。

マネージャーはマネージャーで真っ先に切符売り場に並び、私のチケットだけ取ってきて、「早くあの電車に乗ってください」と言います。

こんな状況で、私一人だけ帰れるわけがありません。参加者のなかには高齢の方だっています。万が一、風邪でも引いたり怪我でもしたりしたら、主催者側の責任です。ちゃんと帰れるか見届けるのが当然だと思い、やっと取れたチケットですがキャンセルするよう伝えました。するとマネージャーは、

「せっかく取ってきたのに……」

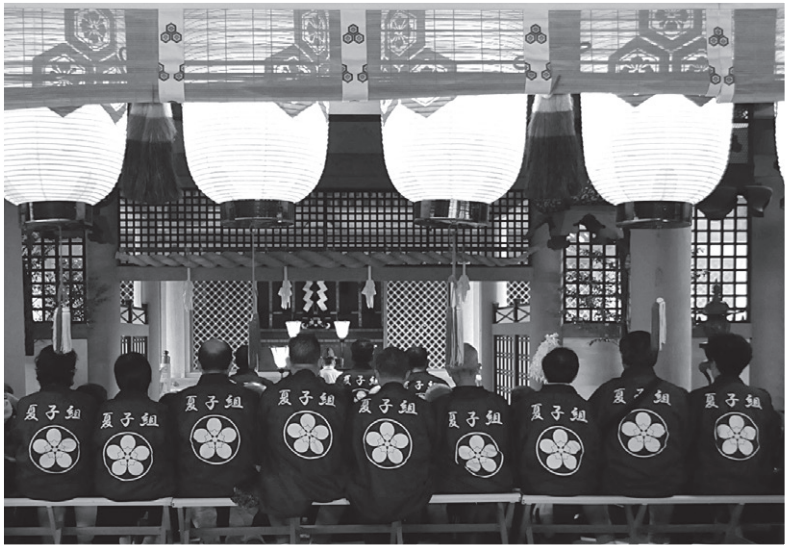
などとぐずぐず言い出します。

「乗れ！」

「乗らない！」

口論していたら、言い合っている私達のまわりに古くからのファンの人たちがわらわらと集まってきました。そして、ごった返している駅の構内で、手をつないで円陣を組み始

「夏子組」ファンクラブイベントにて



めたのです。

旅行会に来た人たちのなかには、最近入会して初めて参加したという人もいます。私の怒っている姿をみたら、そうした人たちがビックリしてしまうと、古くからのファンの人たちは思ったのでしょう。私とマネージャーのバトルがまわりから見えないように囲んでくれたのです。彼らの思いやりのある素早い行動に「これでこそ夏子組」としびれました。

そのあと、帰りそびれた旅行会社の添乗員に、全員が入れるくらいの喫茶店を探してもらい、とりあえず座ってもらいました。そうしてみんなに一息ついてもらっている間に、なんとか全員分のチケットを手配して無事帰ることができたのです。

それにしても、なんというファンのみなさんの心遣い。

私が怒りっぽいのも、どんなことが許せないのかも、彼らはよく知っています。そのうえで、「人前で、そんな怒り方をしちゃダメだよ」という思いだったのでしょう。ファンのみなさんの親心みたいなものを感じました。

私の人間性こみで見守ってくれる「夏子組」のみなさんに感謝！

第六章 悔いも未練もなし

次世代の歌い手を探して

私の人生も後半戦に差しかかっていますが、私にはまだまだやりたいことがたくさんあります。その一つが人を育てること。

未熟な私が言うのもおこがましいのですが、前々から「いつかは」と思っていました。本気で考え始めたのは、独立して個人事務所を立ち上げた頃です。

いくら伝えたい思いがあっても、それを歌によって表現する技術がなければ、人にはなかなか伝わりません。

歌唱力もある程度あって、歌心もあるのに、技術がないばかりにあとちょっとというところから脱け出せない。そういう人に、壁を打ち破るコツを教えてあげたいのです。

かつての私がそうであったように、人は些細なきっかけで、いままで見えなかったものが見えるようになることがあります。

歌えども、歌えども、耳を傾けてもらえなかった私の歌は、市川昭介先生から教えを受けたことで一気に花開きました。先生からいただいたメッセージを次の世代へ残していくことは私の義務ではないかと思うのです。

そう思うようになってからこれまでずっと、育てる人を探してきました。

たとえば、カラオケ大会のゲストで出演するとき、私は楽屋で支度しながら参加者の歌をモニターでずっと聴いています。

いい声が聴こえてくると、すかさずスタッフに、

「ちょっと見てきて」

と声をかけます。期待して待っていると、戻ってきたスタッフが申し訳なさそうに、

「六〇歳くらいでした」

……残念。そういうケースは結構あります。

でも諦めたわけではありません。いつかは逸材に出会えると信じて、まだまだ探し続けます。

歌い手を支える人材を

新人歌手を育てるという夢とともに、歌い手を支えるスタッフを養成したいという夢もあります。

どんな世界でもそうだと思いますが、演歌の世界でもそれで食べていける人というのはほんの一握り。がんばっているけれどなかなか芽が出ないという後輩は大勢います。

歌の収入だけでは生活が苦しい人は、居酒屋でアルバイトをしたり、結婚して旦那さんの理解のもと細々と続けていたり。なかには、そんな生活を続けて、デビュー一〇年目にしてようやくヒットしたという人もいます。事務所がある人はまだよいほうで自分一人で活動を続けている人も……。

いつかは来るかもしれないチャンスを待って、一生懸命がんばっている彼女たちをできることなら、ずっと歌わせてあげたい。そのためには、彼女たちをサポートするスタッフも必要です。

マネージャーの仕事は、スケジュール管理、移動の手配、着付けやちょっとしたヘアメイク、プロデューサーとの打ち合わせなど多岐に渡ります。

いまのところ、とくに養成機関などはなく、各事務所が人員募集をかけて、その人が三年、四年勤めるうちにようやく育っていくという感じ。人を育てるのにはとにかく時間がかかるのです。

収入の少ない歌い手は、マネージャーを雇える余裕など、もちろんありません。だから仕事の交渉はもちろん、本番当日に衣装などの荷物を持っていくのもすべて自分一人。

ヘアメイクや着付けだけなら、近所の美容師さんに手伝ってもらうこともできます。もちろん、そのときはタダというわけにはいかないから、自分のポケットマネーを払って来てもらうわけです。でも、美容師さんはメイクや着付けはできても、出番前に本人の代わりに打ち合わせに出てくれたり、温かいお茶を入れてくれたりはしません。

イベントなどで苦労している後輩たちと一緒になると、うちのスタッフに手伝うように言っています。私の支度の合間にアイロンをかけてあげたりするのですが、うちもいっぱ

いいっぱいで手が回らないときもあります。そんなとき、有能なスタッフを派遣できたらいいなと思うのです。

帯結びやちょっとしたヘアメイクもできて、プロデューサーとの打ち合わせもこなせる。身のまわりのことをやってくれる人が傍らにいれば、歌い手はどれだけ安心して歌に集中できることか。

それは、一人で地方を回っていた経験がある私には、身に沁みてわかります。

私が若い頃、「こうだったらいいな」「ああだったらいいな」と思っていたことを後進には全部叶えてあげたい。

だから、新人も発掘したいし、苦労している歌い手にもっとチャンスをあげたいのです。また、それをサポートするスタッフも養成したい。やりたいことがありすぎて、どれから手をつけていいかわからないぐらいです。

どうやら当分の間、ゆっくり休んでいる暇はなさそうです。

私のひそかな夢

私自身、歌い手としてやりたいこともあります。

それは、小さなライブハウスで歌うこと。

大きなホールでのコンサートとは違った静かな空間で歌ってみたいという思いがあります。

若い頃、私は見ず知らずの人が歌っている姿を見るのが好きで、ライブハウスによく足を運んでいました。

渋谷にあった『ジァンジァン』や新宿の『ロフト』。いまはもうありませんが、上馬の『ガソリンアレイ』は結構いい雰囲気で、好きでした。

誰かをお目当てに行くというわけではありません。スケジュール表を見て「この人はいい歌を歌いそう」とか「この日はバラードを歌う人が多そう」と、行くライブを決めることもありましたが、たいていは思い立ったときにフラっと立ち寄るというパターンでした。

だから、がっかりすることもしょっちゅう。そんなときはすぐ出てくるのですが、それでも知らない人が緊張して汗をいっぱいかいたりしながら、一生懸命歌うのを見るのは好きでした。

「ライブハウスで歌いたい」願望は、もしかしたら「夜キャン」時代にスナックなどで歌ってきた記憶があるからかもしれません。

お客さんは、お酒を飲んだり、タバコを吸ったりしながら、BGM程度に私の歌を聞いていました。そのラフな雰囲気が懐かしいせいなのかもしれません。

ライブハウスには一種独特の雰囲気があります。誰かを目当てで来た人も、フラッと立ち寄っただけの人も、そこではみんなが真剣に歌に聴き入ります。ただ歌が聴きたくてきたからです。

マイクがなくても声が隅々まで届きそうな空間。お客さんの息づかいも聞こえそうな静寂の中、伴奏はピアノだけか、あるいはギター一本。その生音に合わせて静かに歌う。

お客さんはグラスを傾けながら、ゆったりと歌声に酔いしれる。そんな空間に身を委ねてみたいというのが、いまの私のちょっとした夢なのです。

演歌の未来

夢はたくさんあるけれど、一方でなかなか厳しい現実もあります。ここ数年、取材のときに、

「演歌が売れないこの状況をどう思いますか」

と聞かれることがあります。

演歌のCDが、昔のように売れなくなってきていることはたしかです。以前のように爆発的なヒットもなかなか出ません。

けれど、CDが売れなくなることと、音楽が聴かれなくなることは別。私はあまり演歌の未来を危惧していません。

なぜなら、いまの若い人たちも何十年後かには、絶対に演歌を好きになってくれると信

じているからです。幼い頃にコタツでおばあちゃんが聴いていたり、お父さんやお母さんが畑仕事をしながら口ずさんでいたりした歌をいつしか懐かしく感じるようになって、リクエストしたりするようになるのでは、と思っています。

酸いも甘いも経験した頃に、演歌のよさが身に沁みてわかるようになるのです。

だから、たとえ細々とであっても、決して演歌はなくならないと私は思っています。

ただし、聴いてもらうための工夫は必要です。

レコード屋さんは年々、あきらかに減っています。私をかわいがってくれたおじいちゃんたちのお店は軒並み潰れてしまいました。代替わりしたお店では演歌を置いてくれるところは少なくなっています。

若い人たちはどこにいてもダウンロードで買えますが（違法ダウンロードは絶対にダメですよ！）、おじいちゃん、おばあちゃんたちはダウンロードはおろか、CDも聞けないという人がまだまだたくさんいるのです。足腰も弱ってきて、街のレコード屋さんまで足を運べないという人も……。

それなら、行商するのはどうだろう。

何年か前から、私はそんな提案をしています。

民生委員の人たちが「おばあちゃんどうしてるかな」「元気かな」と独り暮らしのお年寄りの安否を気遣い、家を訪ねるついでに、牛乳や必要なものを届ける活動をしているというニュースを最近よく目にします。それを見るたびに、あそこにCDやカセットを積んでいってもいいのにな、と思うのです。

「こんな歌がありますよ」と、ちょっと聴かせてあげて、気に入ったら買ってもらう。私たち歌い手も、地域の公民館のキャンペーンからもう少し足を伸ばして、直接訪ねて行ってもいい。私たちの歌を好きだと言ってくれるおじいちゃん、おばあちゃんが街まで出て来られないと言うなら、私たちが出向いて行ってもいいのではないかと思うのです。

市場がただ縮小していくのを、手をこまねいていては先細りなだけ。

悲観せずに、いままでとは違う方法を試していけば、少しずつかもしれませんが、聴いてくれる人はきっと増えるはずだと思っています。

私の引き際

演歌界のみならず芸能界には定年というものがありません。退職は自己申告。

記者会見を開き「やめる」と言えば即引退です。普通の会社のように引き継ぎもありません。あるとすれば、引退コンサートで数カ所回ることくらいでしょうか……。

けれども引退して一般人になったつもりでも、亡くなれば大なり小なりワイドショーで取り上げられ、昔の写真やＶＴＲが放送されます。また、辞めたつもりもないのに、しばらくテレビに出ていないで副業に励んでいただけで、突然「あの人はいま」の取材が来て「転身！」などと書かれたりもします。

結局、一度認知された芸能人は、辞めても辞めなくてもずっと芸能人なのかもしれません。

さて、まだまだやりたいことはたくさんありますが、私もいずれは退く日が来るでしょう。

私自身は「生涯現役」を目指しているわけでも、「何歳になったら引退」と決めている

わけでもありません。需要がなくなれば開店休業。

仕事がないということは、ずっとお休みということ。そのときは心置きなく遊んで暮らそうと思っています。

時間ができたら、行きたいところは山ほどあります。

タイタニックみたいな豪華客船のクルーズで、世界のあちらこちらに行ってみたいし、南極や北極にも行ってみたい。

お役御免になるまであとどれくらいかわかりませんが、それまでは頑張って働いてお金を貯めなくちゃと思っています。

老後は楽しくすっぴんで

いまは老後不安が盛んに言われていますが、あまり悲観はしていません。考えてもしかたないことは考えないタイプなのです。でも独りになってしまったとしたら心配なので、

老人ホームにでも入れればいいなあと思います。
老人ホームって結構楽しそうだと思いませんか？
みんなで集まっておしゃべりしたり、お茶したり。ときには歌手が歌いに来てくれたりします。一人になりたくなったら、部屋に帰ってテレビでも見る。で、寂しくなったら、またみんなのいるところへ出て行けばいい。なんて気楽に考えています。

老人ホームへは、私も時々慰問に行きますが、どこの施設にも必ず入居者を仕切っているボスみたいな方がいます。なぜか必ず、女性です。
職員の人が「みなさん、伍代さんが来てくれたから、集まってください」と声をかけると、あちこちから車椅子に乗ったお年寄りがヘルパーさんにつきそわれてやってきます。そうして、みんな好きなところに散らばっていると、あとからやってきたボスが「立てる人は歩いて、前の椅子に座って」「はい、あなたはここ」「あんた、そっちはダメ」と次々に指示を飛ばし、みんなはその人におとなしく従って席についていきます。
その様子を見ていて、未来の私はきっと「ああなるな」と確信。
老人ホームを仕切るというのも、なかなかやりがいがあることなんじゃないかとひそかに思っています。

自活できるうちなら、もっと行動範囲も広がるでしょう。
老人クラブみたいな集まりに顔を出して、ゲートボールをしたり、折り紙を折ったり。色々なプログラムがあるから、孤独にも陥らずに済みます。
さらに足腰が丈夫でお金があれば、言うことなし。
電車に揺られて、駅弁を食べながらお友だちと紅葉を見に行ったり、温泉に入ったりできます。そうなれば、もう最高に自由です。

歳を取ると、女性同士の付き合いも変わってきます。
三〇代、四〇代のうちは、バリバリ働いている人もいれば、子育てにかかりっきりの人もいて、それぞれ置かれている立場が違うだけに、なかなか付き合いづらいもの。でも、私の経験から言うと、五〇代を過ぎた頃からみんなちょっとずつ戻ってきます。
仲間には、まったくの独身もいれば、離婚した人もいるし、旦那さんに先立たれた人もいる。子どもや孫がいる人もいます。でも、どんな境遇であっても、女性同士は最後には

一致団結するのです。

みんなで集まると、「老後は、旅行に行けるだけ行こうね」なんて、お茶を飲みながら延々と話しています。

その頃は、もうすっぴんでOK。お風呂にじゃぶじゃぶ入って、上がったときにお化粧しなくちゃ、なんて気にしなくていい。朝からお酒を飲んでも誰も文句を言わないし、ゆっくりおいしいものを食べて、みんなでおしゃべり。こんなに楽しいことはないと思うのです。

でも、すっぴん温泉旅行の域に達するのは、もう少し先。

まだお化粧はしていたいので、いまは一〇年後二〇年後の楽しみとして取っておきます。

悔いも未練もなし

生きているかぎり、必ず老いて、この世とのお別れがやってきます。

私の両親はいまも健在ですが、そのうち介護の問題が出てくるかもしれません。私も歳を取って、体のあちこちが痛くなり、動けなくなっていくのでしょう。

でも、あまり深刻には受けとめていません。そのとき、そのときで大変なことはたくさん起きるとは思いますが、ポジティブなこの性格なので、意外にそういう事態すら楽しめるのではないかと予想しています。

人とのお別れはもちろん、つらく悲しいこと。でも、ある程度の歳になれば、もうどちらが先に行って待っているかという話だと思います。

私の家系は、おそらくみんな長生き。「あそこが痛い」「ここが痛い」なんて言いながら、薬を飲み飲み、天寿を全うするような気がしています。

これまで私は、いつお迎えが来てもいいような生き方をしてきたつもりです。

たとえいま死ぬとなっても、「悔いや未練はなし！」のつもりだから、たぶんこの先もないでしょう。

そうはいっても急に死ぬとなったら、「しまった、あれがやりかけだった」「あれをやり残した」なんて慌てるかもしれません。でも、それでも「まあしようがない。これが精一

杯だったかな」と思えるぐらい、何事に対しても常に一生懸命やってきました。それこそ、自分でも疲れて面倒くさくなるぐらい頑固に。

これからはあまり好きではない運動もほどほどにして、体を鍛えておこうと思います。寝たきりにならないようにして、いつまでも主人と仲良く手をつないで、おいしいものを食べに行ったり、お散歩ができればいい。

そうして、いよいよというときが来たら、「じゃあ、先に行って待っててね」と笑って送ってあげられる、もしくは送ってもらえるような悔いのない人生を過ごしたいと思っています。

何事にも一生懸命に、ひたむきに生きてきた二人だから、これからも一生懸命。

いつかやって来るそのときまで、ずっと手をつないで……。